

トウベラマ考——歌いつぐ干立村の心

与那国茂一（よなぐに・もいち）著

はじめに

私は、西表島西部の浦内川のほとりにあつた浦内村で大正八（一九一九）年に生まれた。その村がしだいに人口が減り、ついに廢村になつて以来、私は干立、祖納と移動して、祖納より軍隊に入隊して除隊後は干立村に本拠地を求めて生活している。

私が子供のころ、ある老人から「シマ倒し者」つまり、村を滅ぼした人間と言われ、はなはだしい場合は、「ユリフサ」つまり波に乗つて流れ寄つてくる海草に例えて軽蔑されたことがある。しかし、思い起していただきたい。明治二六年に八重山を訪れた弘前の探検家の笛森儀助は、「人頭税」とマラリアに苦しむ西表島の人々を見て、八重山全体で遠かず一八か村が廢村となるだろうと予言した（『南嶋探驗』）。その予言は、浦内村を含めてみごとなまでに的中し、一七か村までが廢村の憂き日を見たのであつた。ただ一つの例外となつた村、それこそが現在私の住む干立村なのである。

干立村が廢村にならなかつたのは、さまざまなものがあつたことと思う。しかし、もつとも大きな原因是、周りの村々からの移民を受け入れたという事実にあることは間違いないと思う。つまり、干立村は、まさに「シマ倒し者」たちが、節祭で歌われる「インヌ ササグサヤ ウラウラドゥ ユユル」つまり、海のさき草が浦々に寄りそつてくるのを受け入れることで生き延びることができたのである。

干立に定住するようになつて三〇年。私は節祭の「シチ歌」がプリントされて渡されるものを、毎年手にしているが、毎行事ごとに歌の語句や字の誤りや間違いが目につき気になるようになつた。

公民館の幹部が前年のものを元に写してプリントするが、年若いせいで方言が良く判らないため過ちも起るのだろうと、これまでには善意に解してきた。人間はえてして聞き違い、言い違い、さらには解釈違いも多い。しかも、一度思い込んだら「先輩からかく教わった」とかたくまにこれを墨守し自己の間違いや過ちを認めようとしない意固地さがあるのはどうであろうか。これでは年ごとに少しづつ違つた字句が出てきてそれが重なつては将来大きな間違いのもとになるやも知れぬと思い、後世のため私が聞いてきたものを採録することにした。

私はもとより浅学非才で、学歴も高等小学校二年を出たに過ぎない。その任に非ずと卑下していた。しかし、今回、勇気をふりしぶって、民俗芸能の保存上ゆるされない誤りを質すために、あえて提言してみたいのである。駿馬に鞭打つた小篇であるが、大方のご批判を期待している。

干立の歴史は主として大浜正演・黒島英輝両氏に聞き書きした。ずいぶん聞き落とし、聞き違いがあるのであるが今となつては致し方ない。今ではお二人ともこの世を去つて亡く、ご冥福を祈るのであることが残念でならない。

第一部 トウベラマ考——干立につたわる歌をめぐつて

トウベラマ（干立村）

- 一、フシタティヌ トウベラマ
スーリ タキバルヌ ミウトウイシ
よ
ヒーヨイ スーリ ューバナウレ
二、ミウギシイナ トウベラマ
スーリ タユギシイナ ミウトウイシ
三、シマトウトウミ トウベラマ
スーリ フントウトウミ ミウトウイシ
にありたい

干立村の夫婦石よ
嵩原に居た頃より夫婦石と唱われた夫婦石

- 睦まじくあれ（以下繰り返し）
しつかり根着いて下さいよ
動搖してはいけません腰を据えて下さい
干立村のある限り

島のある限り未来永劫だよ村人もそのよう

トウベラマ（浦内村）

- 一、ウラチムラ トウベラマ
ハーリ トウユミムラ ミウトウイシ
り返し)
二、ミウギシイナ トウベラマ
ハーリ ドウギシナ ミウトウイシ
三、シマトウトウミ トウベラマ
ハーリ フントウトウミ ミウトウイシ
よ

浦内村の夫婦石
果報の村福德の村の夫婦石（以下繰

身動きしてはいけない夫婦石よ
動搖してもいけません
浦内村と共に島のあるかぎり
国のあるかぎり未来永劫だよ夫婦石

トウベラマの解説

このトウベラマの歌は、干立村、浦内村唯一の民謡であるといつてよい。別に沖縄本島の「口説」を真似て、干立、浦内のクトウキ（口説）があるが、これは、役人が自己の名聲を上げるために作詞し唱わせたものと考えられ、そのほかにも、役人が作詞した干立村のありさまの他には調すべきものはない。干立のトウベラマは門外不出と言つてお正月の祝日にのみ干立御嶽のトウリムトウ家である宇保家で唄われたもので、宴席や多数集会の場所で唄う事を禁ぜられていた。それで、一部平民実力者のみ秘匿伝承されて來ていた。階級制がなくなりシチ（節祭）が村の祭事として執り行われるようになつて、一般の人々もこの歌の存在を知り唄うようになった。戦後の一時期迄秘密のベールに包まれていて伝承者以外窺い知ることができなかつたのである。

浦内村にも大小のアトウクを歌つて表記のトウベラマがある。干立のものに大層似てい同一だと言つても差し支えない。浦内村建ても多柄村と同代と考えられ、ナメラ台地の多柄村がタカラの兼久地（砂の堆積地）とナンダディの高台に移動した際、一部が浦内村に移つたとの古老の話によれば、同時代に違いないと考えられるのである。

当時、カトウラ潟原は漫湖であつたようで、カシピダの崖は大小のアトウクの島と地続きで、北側から伸びる砂地のイブの端はパナヌリの岸に連なつてゐたという。一七七一年

のいわゆる明和の大津波で浦田川（現在の浦内川）の河口が現在のように開き、砂土が流れ壊して、アトウクの両島が孤立してからトウベラマと呼称されたと思われる。浦田川支流のタカラ兼久地及びナンダディ台地（多柄、干立と分離）は明和の津波にあり兼久地カニク（砂の堆積地）になり、ナーニ、イミシクを経て更に現在地に住み付くのは一七八九年頃で与那覇在番が津波後の先島復興に尽くした時代と考えられる。トウベラマを作詞歌唱された年代は伝承もなく不明であるが、右の情況から推測すれば干立、浦内両村とも同時代に唄われ始めたと考えられる。

トウベラマ考——歌詞の考察

フシタティヌ トウベラマ、スリ タキバルヌ ミウトウイシ、ヒヨイ スーリ ユバ
ナウレ

この「フシタティヌ トウベラマ」を、フシタティヌ トウベラハマと唄う人がいる。トウベラマを「ハ」を入れてトウベラハマと唄うのは疑問である。「カギヤデ風節」の「キユヌフクラシャ」の様に「フクラア」と唄えば「ラア」と、「ア」の語音が残る。残った「ア」の語音をそのままに「シャ」と唄うように、「トウベラア」と唄えば「ラア」の「ア」の音が残るから、「マ」と接続して唄えば「ハマ」とハの語音を挿入する必要もなく、「トウベラマ」と素直に唄い継ぐ事ができる。「キユヌフクラシャ」はそのように唄っている。「ハ」音を挿入すれば今唄っているよう「トウベラマ」と「トウベラハマ」と二つの名詞になり、「トウベラマ」が「トウベラハマ」と改称される事になる。或いは「トウベラマ」と「トウベラハマ」と二つの呼称が昔から在ったのか?との疑問が残る。昔から「トウベラ」と言い「マ」の愛称がついて「トウベラマ」となって呼称されたに違いない。唄いにくいから、或いは語韻の関係で「ハ」を入れ「ハマ」として唄うというのは理由にならない。「トウベラマ」と「トウベラハマ」と二つの呼称が昔からあつたとの伝承もない。普通、トウベラーといつてているのは、その証しである。

「トウベラマ」を「トウベラハマ」と改称し唄うとすればこれは由々しき問題であり、後世に誤った呼称を伝えるという取り返しのつかぬ大きなミスをわれわれが犯すことにもなりかねず、後世の者に対し申し開きが出来ない。

もう一つ見逃してならないのは「トウベラマ」を、「トウバイラマ」と「バイ」を殊更入れて歌っていることである。これは語を強くするためと思われるが、先に述べた「ハマ」のように早急に訂正し本来の姿に戻すべきである。間違いを改めるに憚ることはない。間違つたまま後世に伝えることが重大な責任になる。

名前の由来については、トウベラマは名称で別に意味はないと思う。海中に独立してボツンと立っているものに対する名称と思われる。

丸間盆山節

まず、現在祖納、干立てて歌われているマルマボンサン節を掲げておく。
 一、ヨホー マルマボンサン ヨホー 丸間盆山という島を
 ユニヤユーニヤ ミリバ
 カジヌニユシリ
 ビリルアタグヤ
 翼を休めているサギ達の賢さよ

エンヤラヤンザ サ エイエイヤ
ハリバサーヌシ

ヒヤマツタン タムヌジュー

(以下三行囃子のくりかえし)

- 二、ヨホー アダティ ウフダディ ヨホー 阿立村、大立村
ウカリニ ソンバレ ウカリ村に ソンバレ村
マヤマ ウテインチ 真山村、落道村
ナリヤ フナウキ 成屋村、舟浮村
(囃子) みごとな村々よ

三、ヨホー スナイ チクヂヌ 祖納津口の

ミチンギヌ ウイニ 標木の上に

イユユ マスンディ 魚をうかがつて

ビリル アタグヤ とまつている海鵜よ

(囃子)

四、ヨホー パナリミジュ クグ 外離島へ渡る海を漕ぐ

フニブニ ミリバ 舟々を見れば

クイユ ナラビティ 声を揃えて

リュウヌ カキグイ みごとな櫨の掛け声よ

(囃子)

丸間盆山節の囃子の意味を考える

民謡「丸間盆山節」は祖納村の民謡である。この歌の囃子の最後の部分は普通、「ヒヤマツタヌ タムヌジュ」と唄われて来ている。しかし、この部分の囃子の言葉について、左記に記す通り現在歌われているのとは違う伝承が祖納村にあった。このことが忘れられているようなのでとくに記しておくことにした。

私は、三、四〇年程前西表島を引き払い石垣島へ移住したが、昭和三四、五年頃のこと、正月の年始に石垣在の故石垣孫治さんを訪問した。その折り、私も自己流で三味線を少々かじっていたので二人して島歌を教わりながらお正月を過ごした事がある。氏は在西表の頃石垣長一さん、新盛行雄さん等と並んで三味線の大家と言われ、先輩に石垣孫安、西表用宗、崎山用能、波照間用幸の各氏、後輩に野底広一さん、宮良全作さん等がおられて民謡がたいへん盛んに唄われたものであつた。その日は崎山節、殿様節、祖納岳節等を教示されながら楽しいお正月であつた。たまたま「丸間盆山節」を習つたおり、氏が途中で三味線を止め私の囃子を唄い終わるのを待ち次のよう教示して下さつた。「自分が若く三味線を自己流で習い始めの頃、イルンテ家の山田用福爺さんから、囃子の間違いを指摘された」という。

今唄っている「ヒヤマツタヌタムヌジュー」は誤りで、間違つて唄つており、「ヒヤマツタヌムツサ」が本当の囃子でそのよう唄うのが正しい、と教えられた。「後輩たち三味線を嗜む者に忠告し以後間違えて唄わぬようにしてくれ。と山田の爺さんに懇々説諭された

との事である。「ヒヤマツタン」は掛け声で「やつこらさ」に当たり「タヌムツサ」は頼もしい、頼むぞの意で、西表の方言である。「タムヌジュ」という方言は西表ないと教示された。以後心に深く刻み忘れてはいない。

西表に住んでいた時は先輩各氏が多く居て年若い私の言葉は到底聞き入れてもらえないかった。今頃になつてこの事を持ち出せば西表在住の人々は多分相当多くの人達が反発し異議を唱えるだろう。しかし、これは私の考え方解釈でもない、山田の爺さんの言葉である。また、山田の爺さんは「往昔はユカリピトウ（のちの土族）だけが三味線を手にすることができた。ブザ（のちの平民）は怠慢に流れ農仕事を疎にして、貢納に差し支える恐れがあるというので、誰彼となく三味線を手にすることは許されなかつた。今は、嗜みとして民謡を三味線に乗せ唄う者が多くなり、島の歌が皆唄える結構な世の中になつた。まことに嬉しいことである。しかし、歌の文言その言わんとするところの意を充分吟味して唄い後輩たちに伝え正しく唄うようにしてくれ」と言われた。

歌詞にこめられた心を私なりに解説しておきたい。一句目は、仲良田原や外離島の耕作地に往来するごとに見返る「盆山」には、日暮れになると風向きを知つて、北風には南側、南風には北側と風を避けて翼を休めているサギやウミウの賢さにはまことに感嘆するほかない、と唄い上げている。二句目は、縁故や知人、友人の居る各村々には、ご機嫌伺いや疎遠を謝すなどでかたときもおろそかにしてはいけないと教え、また村が違うからといってばかりにしたり差別したりしてはいけないと、島で暮す智慧を唄つたものと思う。三句目は、一句目とやや似ていて祖納の港口に出入りする舟への目印のみちしるべの木の上にとまつて魚を狙うウミウの姿は見事といふほかないと唄つている。四句目は、外離島の耕作地への往来の三反帆船が、競つて漕いでくるその姿と勇壮な「エイサ」「エイサ」の掛け声の競い合いを描いている。

最後に一言付け加えておくと、四句目は私が教わつたところでは、「リュウヌカキグイ（櫓の掛け声）」と唄うのが正しく「リュヌウタウトウ」と唄う人があるのは間違いである、という。外離島に耕作に往く舟は三反帆の舟で二、三隻で競漕して仕事に往つたもので、お互い競い合い「エイサ」「エイサ」と掛け声をあげたものでその様を唄つたものであるといふ。

先師先達の忠告を忘れぬため、非才を顧みずここに記し後輩の反省をお願いしたい。歌は唄う人が主とか言つて間違え取り違えて唄つても、その間違いを指摘し正してくれる先輩もいなかつた。よほどの親しさがない限り放任しておくのが普通であつた。これでは一人よがりになりお山の大将になり兼ねない。島の民謡を正しく後世に伝えて行くためには先人の言を良く聞きその意を解し自己反省し歌の意、言わんとする意図、各章との継りを把握解釈しなければならぬ。伝承は「言い違い、聞き違い」その意図の把握解釈違いがあるのは、人間である限り避ける事のできぬ落とし穴である。

先人の文言口伝が正しく現代人の意訳解釈は間違い誤りとも言いきれぬ。ここで正しい方言が重要な意味役割を持つ。正しい方言を知らぬため歌の意図が汲み取れぬ場合が多い。方言を知つて文言を読み下していけばその言わんとする意図が解る筈である。

鳩間節の囁子の意味は
鳩間節は、鳩間島では次のように唄われている。唄い出しの部分だけを示す。

一、パトウマ ナカムリ パリヌブリ
クバヌ シチャニ パリヌブリ 鳩間島の仲森に走り登つて
ハイユヨー テイバ
カイダギ テイトウルトゥ デインヨー^(以下三行は囁子。くりかえす)
マサティ ミグトウ

この囁子の部分を、郡下の各村々の人々は「カイダキ チトウルトゥ デインヨー」と唄っている。そして、その意味は「搔い抱き乳取ると」だと教える人もいる。しかし、この囁子は間違いであると今は亡い慶田城勇さん（上原村出身で長く鳩間島に在住された）に教えられたことがある。それによると、「カイダキ ティトウルトゥ デインヨ」と唄うのが正しい。「カイダキ」は「これだけ」「これほど」と言う意味で、「ティトウルトゥ」とは手に取るようとの意味である。鳩間島よりバイバダ（南方）西表島の山々が手に取るようくつきりと眺められると言う意味である。鳩間島の人々は皆このように唄い解釈している。「他の村の人々が『カイダキ チトウルトゥ』と唄っているのを見聞きするところついを通り越して苦々しい」「鳩間の人々はそんな唄い方をせぬだろう。島生まれの人に聞いてみる事だ」と教示された。

三味線が上手で鳩間島の唄に造詣の深い浦崎英七さんに聞いた処、その通りであると言つておられた。現八重山民謡の大家と言われる方達の中にも「搔い抱き乳取る」と唄つておられる方もいるので嘆かわしい次第である。と、島の言葉はその土地、島で生まれ育つた人々が正しく話す。他村の人々がいくら上手に真似話しても、発音やアクセントに違があり、そうたやすく真似して言えるものではない。その言葉、唄の文言、その意味についてはなおさらである。と教示されたのでここに記しておく。

デインサ節

- 一、バンヤ ムニシカサ
トウシユタル ナラバ
ヤラビトウジ サリキ
キチガイナリユ
デインサー
 - 二、ピトウヌ トウジミウトウ
ミウトウニドウ カイシャル
トウシユリヤトウ ヤラビヤ
ウチランムヌ
 - 三、アサニスル ミドウム
アサトウリスル ミドウム
ウリカラドウ
ブトウユ ユダンシミル
ヤーマーリスル ミドウム
ナガビリスル ミドウム
キンヤネヌ ミドウム
- 年寄りの繰り言を聞かそう。
年寄りになつて
若い女子を妻女にする
まことにもつて氣違い沙汰だ
ということであるよ（囁子）
夫婦というものは、
似た者夫婦がよい
年寄りと若い者とでは
まつたくもつて似あうものではない
朝寝する女
芋の朝掘りをする女は、
朝食が遅くなつて
夫まで油断させてしまふ
家庭に居つかず、
おしゃべりをしに出歩く女は
家事や機織りが疎になつてついには

- 愛郷歌「干立村」**
- 一、クバやベンドウにしづまれる ビロウやヤエヤマヤシに鎮まれる
もとのウガンはゆうじやくしたいき 元の御嶽は有若氏泰基
むらだてはじめてまもりがみ 村建て始めて守り神
 - 二、ウイヌカーはインヌムラ 干立村よ名高い村よ（囃子）
スリーリ フタディムラトウユミむら 上の塞井戸は西の村
アダヌカーはアンヌムラ アダヌ塞井戸は東の村
 - 三、うみにどつかり海にトウベラーマ 身すぎ世すぎの宝水
アタグシルサヤやどりいて どつかりトウベラーマの岩よ
フタデとともにゆるぎなし 海鵜と白サギが宿り居て
四、ユダムチカイシャごほんまつ 干立と共に搖るぎなし
枝持ち美しや五本松

を使い分けて唄う事で

ある。これを特に強調しておく。

デインサ節の解説

これは、干立村の小底ブナリさんの伝承によるデインサ節である。デインサ節は十八番まであるが、後世の人の作によるものが二、三ある。「人や親ままどの句」、一般に歌われている「親子美しや子から」がある。脱落したものに「冗言さる女」など、各句の間の一部分に口当たりの良いものにすり替えられたものがあり、各句を良く吟味すれば未だ有ると思われるが、煩わしいのでここでは、後世の作を除いた。諸賢のご判定を仰ぎたい。

ただし、一番大事なことは婚前の女子には「ミドゥン」婚後の女子には「ミドゥム」と、

- 一六、クルマヤ ミブシヌ フサビシドウ
トウリヤ シマウティ シクブン
ピトウヌ イタジラ ミドゥン
シキンヌ イーシティ
一七、クルマヤ ミブシヌ フサビシドウ
シシリヌミチン ハイミグル
ピトウヤ ミブシヌ シタシドウ
フドウユ フアイシティ
デインサブシバ チクリ
ヤラビンキヤニ ユマシ
シキンヌ イマシミ ナススドウ
バンヤ ニガユル
一八、ウイバルヌ シマヤ
ヤマジマドウ ヤシガ
シミナリティカラヤ
ハナヌ ミヤク

家庭の離散を招く
犬は家の番が職分、
鶏は刻時告げが職分、
あの男この男とついたり離れたりする
尻軽女は世間のもの笑いの種
車は三寸の楔で
千里の道を往復する、
人は三寸の舌で
身を亡し家庭の破滅を招く
世間の戒めとなすことが
我が願いである
上原という村は、
いなかの村であるけれど
住み慣れてみれば
花の都と同様だ

若者達に唄わせ
デインサ節を作詞して
身を亡し家庭の破滅を招く
世間の戒めとなすことが
我が願いである
上原という村は、
いなかの村であるけれど
住み慣れてみれば
花の都と同様だ

犬は家の番が職分、
あの男この男とついたり離れたりする
尻軽女は世間のもの笑いの種
車は三寸の楔で
千里の道を往復する、
人は三寸の舌で
身を亡し家庭の破滅を招く
世間の戒めとなすことが
我が願いである
上原という村は、
いなかの村であるけれど
住み慣れてみれば
花の都と同様だ

- ゆうひをあびてあでやかに
アダネのおかにそそりたつ
ミキやキガゾのいろそえて
みどりしたたるカナザヤン
マヤダンないてわをつくる

タクやグシクミ、ウブヌイユ
ムチイユ、グルクンすなどりに
そのなもたかしタカラピー

ナーニー、タカラのむらあとに
なかだて、はるだてのジーセンの
ながれゆるやかヨナダのかわの
いしばしわたればヤンダルにおい
ゴツカルないてはるうらら
じようふバサヌヌ、グイフを
ほしたてさらしたマヤパタラ

一〇、かみをすいたカビヤあと
じよふバサヌヌ、グイフを
ほしたてさらしたマヤパタラ

九、きゅうようになりしタカラのむらのあと「球陽」に載りし多柄の村の跡
ながれゆるやか与那田の川の
流れゆるやか与那田の川の
石橋渡ればツルアダンが匂い
アカショウビンが啼いて春うらら
紙を漉いた紙屋跡

一二、まだけねじりてこしひもに
みよしにくろがねウニファーが
おしわけはらいてなはのみなといり
一三、せきたんほりだしたチクラヤン
ひごとよごとやすみなく
ざりがにつくるすんだんご

一二、まだけねじりてこしひもに
みよしにくろがねウニファーが
おしわけはらいてなはのみなといり
一三、せきたんほりだしたチクラヤン
ひごとよごとやすみなく
ざりがにつくるすんだんご

三四、ナイナトウはさんでブシキヤン
ガサン ガラブタ タチオーニー
ギゾもみちひにしおをふく
ながれながされかどれた
てつよりかたいガルンイシ
カラカラコロコロいしのすず

五六、タクやグシクミ、ウブヌイユ
ムチイユ、グルクンすなどりに
そのなもたかしタカラピー

七、ナーニー、タカラのむらあとに
なかだて、はるだてのジーセンの
ながれゆるやかヨナダのかわの
いしばしわたればヤンダルにおい
ゴツカルないてはるうらら
じよふバサヌヌ、グイフを
ほしたてさらしたマヤパタラ

八、タクやグシクミ、ウブヌイユ
ムチイユ、グルクンすなどりに
そのなもたかしタカラピー

九、タクやグシクミ、ウブヌイユ
ムチイユ、グルクンすなどりに
そのなもたかしタカラピー

一〇、タクやグシクミ、ウブヌイユ
ムチイユ、グルクンすなどりに
そのなもたかしタカラピー

一一、めいわのつなみユリキマシ
へそまでつかるマラントウに
フクリピヤカカしたアマダウチ

一二、真竹をねじって腰紐に
舳に黒鉄の英雄ウニファーが
押し分け払いて那覇の港入り

一三、石炭掘り出すチクラ山の地
日毎夜毎休みなく
ザリ蟹つくる砂団子

三四、ナイナトウの地をはさむマングローブ林
ガサミ、ガラブタ魚、立ち鰐
ヒルギ貝も満干に潮を吹く
流れ流され角とれた
鉄より固いガルン石
カラカラコロコロ石の鉛

五六、手形を残してジイリヤの洞窟
いわしの寄り来るタイフチの地を
廻つてナメラの地の浜上は
流れゆるやか与那田の川の
石橋渡ればツルアダンが匂い
アカショウビンが啼いて春うらら
紙を漉いた紙屋跡

七、ナーニー村、多柄村の村跡に
仲立春立の地船の

八、ナーニー村、多柄村の村跡に
仲立春立の地船の

九、ナーニー村、多柄村の村跡に
仲立春立の地船の

一〇、ナーニー村、多柄村の村跡に
仲立春立の地船の

一一、ナーニー村、多柄村の村跡に
仲立春立の地船の

一二、ナーニー村、多柄村の村跡に
仲立春立の地船の

一三、ナーニー村、多柄村の村跡に
仲立春立の地船の

五六、カソムリワシ啼いて輪をつくる
蛸やコウイカ、大魚
もちの魚やたかさご魚の漁りに
その名も高し多柄干瀬

七、カソムリワシ啼いて輪をつくる
蛸やコウイカ、大魚
もちの魚やたかさご魚の漁りに
その名も高し多柄干瀬

八、カソムリワシ啼いて輪をつくる
蛸やコウイカ、大魚
もちの魚やたかさご魚の漁りに
その名も高し多柄干瀬

九、カソムリワシ啼いて輪をつくる
蛸やコウイカ、大魚
もちの魚やたかさご魚の漁りに
その名も高し多柄干瀬

一〇、カソムリワシ啼いて輪をつくる
蛸やコウイカ、大魚
もちの魚やたかさご魚の漁りに
その名も高し多柄干瀬

一一、カソムリワシ啼いて輪をつくる
蛸やコウイカ、大魚
もちの魚やたかさご魚の漁りに
その名も高し多柄干瀬

一二、カソムリワシ啼いて輪をつくる
蛸やコウイカ、大魚
もちの魚やたかさご魚の漁りに
その名も高し多柄干瀬

一三、カソムリワシ啼いて輪をつくる
蛸やコウイカ、大魚
もちの魚やたかさご魚の漁りに
その名も高し多柄干瀬

五六、夕日を浴びてあでやかに
アダネの地の丘にそそり立つ
セイシカとツツジの色添えて
緑したたる金座山

七、夕日を浴びてあでやかに
アダネの地の丘にそそり立つ
セイシカとツツジの色添えて
緑したたる金座山

八、夕日を浴びてあでやかに
アダネの地の丘にそそり立つ
セイシカとツツジの色添えて
緑したたる金座山

九、夕日を浴びてあでやかに
アダネの地の丘にそそり立つ
セイシカとツツジの色添えて
緑したたる金座山

一〇、夕日を浴びてあでやかに
アダネの地の丘にそそり立つ
セイシカとツツジの色添えて
緑したたる金座山

一一、夕日を浴びてあでやかに
アダネの地の丘にそそり立つ
セイシカとツツジの色添えて
緑したたる金座山

一二、夕日を浴びてあでやかに
アダネの地の丘にそそり立つ
セイシカとツツジの色添えて
緑したたる金座山

一三、夕日を浴びてあでやかに
アダネの地の丘にそそり立つ
セイシカとツツジの色添えて
緑したたる金座山

ヤコ。第一四句のガラブタは、鰐のような顔をした魚。タチオーニは泥の中に垂直に入つて行く細長い魚。キゾの和名は、シレナシジミ。第一五句のガルン石は、川底にあつた塊が流水に転ばされてできた堅くて丸い石。

第二部 千立村の年中行事と古謡

千立村の年中行事とそれにかかる古謡を収録する。方言のみによる歌詞とその直訳に解説を加えるという構成ですすめでいこうと思う。なお、敬老の日など、全国で行なわれているものは省いた。

千立村の年行事（旧暦）

日取り 方言（漢字表記）

行事の内容

一月 四日	火の神の天からの降下
二月 ニンガチタカビ（二月祟べ）	祖先供養の墓参り
二月 フサパヌニンガイ（草葉の願い）	悪疫防除祈願
二月 タニトウリ（種子取祭）	害虫防除祈願
三月 サノチ（三月三日）	稻の播種の祈願
三月 ピンガン（彼岸）	浜降り、女の節句
四月 シーミー（清明）	清明祭、一門の祖靈祭
五月 ユニンガイ（世願祭）	旧三月の豊年祈願祭
五月 シコマ（初穂祝）	稻の初穂奉納
六月 プリヨイ（豊年祭）	天候願い
六月 カドウカドウヌニガイ	豊年感謝の祭
七月 ソール（お盆）	子寅午申の四方に願う
八月 斗搔祝	八八歳の祝などの長寿の祝
九月 シマフサラ（悪疫払い）	十五夜にミリクとオホホの面を飾り、ねぎらう
九月 シチ（節祭）	山羊の血を染めた注連縄を村の入口に張る
一〇月 ジュンゴチタカビ（十月祟べ）	獅子、ミリク、オホホ千立村に降臨
一一月 トウンジ（冬至）	
一二月 パチソンガチ（初正月）	
一二月 フキヌマチリ（ふいご祭）	鍛治屋の祭、現在廃止
一二月 一四日 火の神祭	火の神の昇天

種子取祭

タナドウリクトウキ

種子取口説

一、トウシニ イチドウヌ タナドウリエ
ワリガワリモトウ イサミイディ

年に一度の種取祝には
私も吾もと勇躍して

五、	バヤヌ	ビキ	マイミキヌアヨー
四、	オリヤンナヨ		マイミキヌ
三、	ナカヌ	スザ	ナンドウンヨ
二、	ナンドウンヨ		ムチアース
			ナンドウンヨ

フクイバナ
マサル
ミキ サントウネバ
マサル
フクイバナ
マサル
ビキリヤマヨ
ビキリヤマヨ

米神酒のアヨー

ヨー
米の神酒の発酵しはじめの香ばしさは
何よりもすばらしい
糯粟の神酒の発酵は
本当に香ばしい
タクチキ（未詳語）の発酵しはじめは
何よりもすばらしい
中の兄さん方も
良くお出下さった
我が家の兄弟よかわいい兄弟よ

種子取口説の解説
昔は年に一度しか作付できぬ稻作だった。播種が終わればヤーマチといつて、一週間ほどは心身を清浄にし、家族一同も身を慎み、三味線、歌舞音曲を厳にいましめ、食用米の精白のための杵の音すらも小さく押さえ、子供が泣かぬよう、大声を出さぬよう、細心の注意を払い、ひたすら稻の種子の生育が順調で、鳥獸の害もないよう祈り、方言でブナリ神（カン）と敬つておよびする叔母、伯母、姉妹を招き、神仏と家の守り神であるヤーカザシに祈願し、盆をくみ交わす習慣であった。

イバチは、糯米のおこわの一種である。藁を一尺程に切り、お盆かお膳に敷いて、糯米のおこわを三角形に握り、上を尖らせ、裾を広くなるように三角型に握った強飯のことである。ソーチといふのは、心身ともに清浄にすることをいう。古語の「さうじ」つまり精進である。イバイ。イバイ草フサともいう。根が強いチカラシバという草である。ユシキは、稈が太くて強いスキである。アフは、担い棒、天秤棒のことである。第四句の「クルキン」は意味がよくわからない不祥語であるが、とりよせたイバイ草とユシキの中から生きよいの良いものを抜き取つて苗代田に差す習慣であった。

タニヌシナジナ トウリカタミ
アフニヌキトウリ イサミクリ
ウヤシ ハヤス ウカンカイ
ウカマ カンタナ ソーチバシ
ナシルダニ イヒ マキティ
ティンシウチマリ ウカンカイ
ウテイル テイジヤ ヤファラカニ
イバイ ユシキユ トウリユシテ
クルキン ヌキトウリ イキタテ
イバチ マイナシ ソーチバシ
ブバマ ブナリン ウンチチエシ
ニゲーヌ グシパナ トウリカワ
イワイヌ サカジチ スルクトウニ

梗と糰の種子の品々を取り担ぎ
荷担い棒に抜き取つて勇んで
敬し囁す御神様へ
窯の火の神、仏壇の祖先もお清めして
苗代田に行つて種子蒔きをして
天神地祇のお神様へお願ひかけて
蒔く種子粒も丁寧に
力芝とすすきを取り寄せ
勢いの良いものを抜き取り願田に生け置
強飯の初を前に飾りお清めをして
伯母様、姉妹にも声を掛けてお呼びして
種子取祈願の神酒を互に取り換して
お祝いの盃を上げることです

ウヤショリヨ

六、ダディイフタニ マイノリダニ

オリヤンドヨ

七、イモルミジ ヌミキサヌ

ビキリヤマヨ

八、クモリミジ カチキサス

ビキリヤマヨ

米神酒のアヨーの解説

米の神酒（ミキ）、白酒（ミシ、ミシャグ）もできばえよく、香ばしい。その喜びを兄弟で分かちあつた。神酒白酒を差上げたが、兄弟達はイモルに入れた僅かな酒でも呑み干しきれなかつた。

サントウンネバ、とタクチキは、現在のところ不祥語である。ダディイフは竹に似たダンチク。西表の普通の方言ではダードーという。クモリ水は、田の整地後に残つた凹地に溜まつた水、イモル水は、クワズイモの葉で作つた使い捨ての簡単な飲み水入れの水。

シパヨヒユングドウ

一、ウブヌガヤヌ シパヨヒヨ

二、ヤマヌキヌ シパヨヒヨ

三、ミヤラビヌ シパヨヒヨ

四、シパバヨヒ シパヨヒヨ

五、キムバミリ シパヨフ

六、チクブザヌ アダスヌ

七、サジブダヌ タクマスヨ

八、イシャナギ タビウケクデイ

九、ミウマイ タビウケクデイ

十、ユルシヒリ チクブザヨ

十一、キムヤイヒリ サジブザ

十二、ユルスクトウ ナラヌヨ

十三、キムヤイクトウ ナラヌス

十四、ナクナクトウ ユムユムトウヨ

十五、ミウマイタビ ウケクケ

十六、チクブザヌ サリバリヨ

十七、サジブザヌ サリイヒ

十八、マキクシニ ミリバヨ

十九、フビスラシ ミリバドウ

二十、チクブザトウ フタナリシヨヨ

お神酒を召し上がつて下さい
ダンチクのように稻が育つた稔り田に
祈願しに来ましたよ
クワズイモの葉に汲んだ水より少ない神酒も
干し切れないかわいい兄弟よ
田の水溜まりよりも少ないお神酒も
呑み干しきれないよ かわいい兄弟よ

印結びのユングドウ

野原の茅の所有の印は

切り取り束ねて棒に抜き立てておく

山の木の所有の印は

根元を踏み確かめて印をつける

我が妻にしようと思うひとは

氣立てを見て約束する

乙女の氣立てを見て

約束してあつたが

チクブザ役人の企みに

サジブザ役人の仕様によつて

石垣の御仮屋の用役に

出向いてこいと言い付けられ

許して下さいお役人様

差し替えて下さいお役人様

許すことはできないよ

胆入れにし差し替えることもできない

泣く泣く嫌々ながら

御用旅を終えてきたら

チクブザが連れ去つて

サジブザが連れて行つてしまつた

垣根ごしに見れば

首をそらして見れば

チクブザと二人で

- 一、 サジブザトウ フタナリ
二、 トウルスピバ
カラスピバ
トウクトウクシ ビリブンガヨ
ナカングミ
ビリブンセ
- 三、 サニサニシ ビリブンガヨ
マイナショ
ナカングミ
ビリブンセ
- 四、 サニサニシ ビリブンガヨ
カラスピバ
トウクトウクシ ビリブンセ
ナカングミ
ビリブンセ
- 五、 フビバダギ ビリブンガヨ
ムムヤラビ ビリブンセ
ウリミリヌ ニタサヌヨ
クリミリヌ シンサヌ
ンニバヤミ ブラルヌヨ
キムバヤミ ブラルヌヨ
一八、 ウデイバブリ シティラルバヨ
一九、 チキクルシ シティラルバヨ
キリクルシ シティラルバ
二一、 イシバ トウリナンギヨ
バヤニ ムドウリイフ

サジブザと二人して
灯火を前にして
暖炉を中心して
うれしそうに楽しそうに
安堵の体で座っている
頸を抱いて座っている
腿を突き合せて座っている
それを見れば辛く苦々しい
胸が痛くて見ていられない
憎たらしくて見ていられない
腕を折つてやりたい
足を折つてやりたい
突き殺してやりたい
蹴り殺してやりたい
石を取り投げつけてやり
我が家に戻った

シパヨヒュングドウの解説

役人の意図を知りながらも、百姓なるが故、反抗することも拒否する事もできぬ惨めさ、役人の意のままに、公用をすませ、僥幸を念じつつ帰宅したが、案に違わず、女は役人の賄女にされている。泣くに泣けず放心、一夜試みに覗き見したら、憎い奴二人、頬を寄せあい、首を抱いて我が世の春といったところ。畜生どうしてくれようと怒りがこみあげるが、役人の仕返しを考えると後が怖い。仕方なく思いのたけをこめ、石を投げつけてやつた。

百姓の惨めさ、悔しさが遺憾なく表現されていて、封建制下の暗黒時代を想いやられて痛ましいかぎりである。

- ウナザシユングドウ 宇奈利崎のユングドウ
- 一、 アサバナニ ウキティヨ 早朝起き抜けに
カンジルバ ピッチノヒ 弁当入れを肩にかけて
- 二、 マイヌ パマニ ウリティヨ 前の浜辺に下りて
ウブパマニ スリティヨ 大泊浜に揃つて
- 三、 ヤラビケーヤ フニトウリ 若者達は舟をとりよせろ
ウブナマーヤ ヌリオーラ 大人達はそれに乗ろう
- 四、 クギナクギ ヤラスケ 舟を漕ぎに漕ぎ行く程
ユシナユシ ヤラスケ 寄せに寄せれば
- 五、 トウベラマデイヌ ソーヤヤヨ トウベラマという夫婦岩は
ミウトウカイシャディ ミルソンネ 夫婦の睦まじきを見るようだ
- 六、 クギナクギ ヤラスケ 舟を漕ぎに漕いで行けば

ユシナユシ ヤラスケ

寄せに寄せれば

七、ウタラデイヌ ソーヤヤヨ

ウタラの浜辺の夫婦岩は

ミウトウカイシャディ ミルソンネ 夫婦仲良く寄り添うように見える

八、クギナクギ ヤラスケ

漕ぎ漕ぎ行く程に

九、ウナザシミズン クイバダリヤン ウナリ崎の深海も何なく渡りきつた

ユシナユシ ヤラスケ

寄せ寄せ行く程に

スギバンパマナ クイチキヤン

スギバンの浜に漕ぎ着いた

一、パガムスケーヤ フニウキリ

若者達は潮時を考えて舟を浮かべなさい

ウブナマーヤ ウリオーラ

大人たちは舟を降りよう

一一、ユニヤナラバ パイサクフ

日暮れになれば早く来なさい

ニビサソーヤ クイチキリ

遅い人には声をかけなさい

一二、スギバンパマニ ウリティヨ

大泊浜に集つて

一三、パガムスケーヤ フニトウリ

若者たちは舟をとれ

ウブパマニ スリティヨ

大人達は乗りましょう

一四、クギナクギ ヤラスケ

漕ぎに漕ぎ行けば

ユシナユシ ヤラスケ

舟を漕ぎ寄せれば

一五、ゾンバラマヌ ナリシキバ

艤べその鳴る音を聞いたら

ユビヌ クトウドウ ウビダス

昨夜の夫婦の営みを思い出した

一六、クギナクギ ヤラスケ

漕ぎ漕ぎ行けば

ユシナユシ ヤラスケ

舟を漕ぎ寄せれば

一七、マイヌパマナニ クギチキヤン

村の前の浜に漕ぎ着いた

ウブパマニ クイチキヤン

千立の大泊浜に漕ぎ着いた

一八、パガムスケーヤ フニウキリ

若者たちは千上がらぬよう舟の碇をおろせ

ウブナマーヤ ウリオーラ

大人たちは舟を下りよう

一九、アツアンオーラ バガムスケ

明日も行こう若者達よ

アシテインオーラ ウブナマ

明後日も行きましょう大人方よ

ウナザシユングドウの解説

ウナリ崎の畠耕作に伝馬船で往来する際の道行き歌で、行き來の際見る二つ並んだ岩礁を夫婦と見立てて、夫婦和合の証として受け止め、かく有りたいと願う。舟の艤を漕ぐ艤べその軋む音には昨夜の夫婦の営みを思い出したとまことに風刺に富んでいて着想が秀逸である。そこには、何のいやしさもてらいもなく、自然に口から出了したもので、何の不快感も感じられない。なお、ソーヤというのは、海中にある独立した岩礁のことである。

ヌチガフユングドウ

一、カースパタヌ アブタマ

パニバムイ トウブケ

バガケーラヌ イヌチ

シマトウトウミ アラショーリ

生命果報ユングドウ

井戸のそばにいる 蛙に

羽根が生えて 跳ぶまで

(囁し くりかえし) 私たち皆のいのちが
(囁し くりかえし) 島と共にありたい

- 二、ヤースマルヌ キザメマ
ウブトウウリ ヤクナルケ
- 三、ヤドウヌサンヌ フダチスマ
ウブトウウリ サバナルケ
- 四、ムリムリヌ ヤマメマ
ウブトウウリ カミナルケ
- 五、グシクヌミイヌ バイルレマ
ウブトウウリ ザンナルケ
- 六、プシキヌシタラヌ キザゴーマ
ウブトウウリ ギラナルケ
- 二、ヤースマルヌ キザメマ
ウブトウウリ ヤコウガイになるまで
海に降りて
雨戸の棧にいる ヤモリが
海に降りて 鱗になるまで
森に棲む 山亀が
海に降りて 海亀になるまで
石垣の隙間にいる トカゲが
海に降りて ジュゴンになるまで
マングローブの下の シナレシジミが
海に降りて シャコガイになるまで
- 家の周りの カタツムリが
- ヌチガフユングドウの解説
- 不可能を可能にしたい願望で、宇宙の悠久に比べ、人間の生命の儂さは、草葉に宿る朝露のごときものである。各章に唄つた文言は、あり得ぬことを、小動物のなぞらえてかくありたいと心情を吐露してい余す事がない。これは皆の願望でもある。文明にとりのこされたような辺地のこの島にこのような雄大な比喩を唄つていることは、驚きとともに、誇りに思う。この歌を先人の徳として末長く伝えていきたいものである。
- 浦内村の古謡
- 一、ウブカーラヌ パタサナ 大川の端に
プシキヌ ムイソーヤ マングローブが生えているのは
- 二、ミナトウバーナ ムイ 潮水と真水の混じる所に生え
ヤラザバダーニ ムイル 湿地帯に生える
- 三、ユダバ イディ ムイ 枝が出て生え
- 四、ウルチムヌ ナリヨッタラ 又を出して成長する
バガナチヌ イフダラ 初夏の季候になつたら
- 五、パナディアル パナサキ 万物の活きづく頃になつたら
ナリディアル ナレーナルソ 万物の花は咲き競い
- 六、パイカジヌ ウスダラ やがて実を結ぶ
ブンパヌカジヌ イフダラ 暖かい南風がそよぎはじめたら
- 七、パナディアル パナウティ 季節風がおさまつたら
ナリディアル ナレーウティ 花も役目を終えて落ち始め
- 八、ミナトウバダナ ウティル 実も摂理に基づき落ちる
ヤラザバタナ ウティル 寒の川端に落ちる
- 九、ピシスーナ イデー イヒ 引き潮と共に出ていき
ピシスーニ ソンガレ 引き潮に引き流され
- 一〇、ウナザシ ミズ イデー イヒ ウナリ崎湾内に出て行き
ユニヌ フカ ナガサレ 砂の堆積より外に流され
- 一一、サイナンナ ムマリ 小波にもみくちやにされ

- ナンバラニ クルバサレ 潮流に転ばされながら
 一二、ミチスチーナ ソンガレ 満ち潮に引き戻され
 マンスニー ペーリキヒ
 一三、ユヌ ミナトウ ペーリキヒ
 ユヌ ヤラザ ペーリキフ 同じ湿地帯の泥土にたどりつく
 一四、ドウルヌ ミーバ ヤーシ 泥土に居つき、
 ミタ フサラバ ヤース 同じドブ泥に根付ける
 一五、ミナトウバダーナ ムイ 川岸近くに居ついて生え
 ヤラザバダーナ ムイル 泥土の中に生育する

プシキのユングドウの解説

マングローブの生態を歌つたもので、着眼が素晴らしい。現在のわれわれには、到底足下にも及ばず、脱帽のみである。初夏になり花をつけ、実になつて生育し、そして落ちる種子は細長く、手の中指ほどもある。落ちた種子は、引き潮に流され、沖合遠くまで流されるが、上げ潮で戻つてくるのは、途中何かに引っ掛かっていたのか、潮とともにどつてくるが、それは僅かにしか過ぎない。

落ちる箇所が泥土であれば、そのまま突き刺さつて生える。その繁殖力は旺盛で、二、三〇年経てば目を見張るものがある。耕作に往還した時分にみたウマタ・クマタのヒルギ林は疎林であつたが、現在では密生していく目的地を見失いがちで、慣れぬ人は迷つてしまふ程である。

このユングドウは郷土史に興味のなかつた三〇代の頃、叔父である糸数寛次と母サカヤから聞き書きしたもので、今では音符が全く思い出せず、念を入れて習熟しておくべきだつたと脣を噛んでいる。元の南風見村にもプシキユングドウがあるのを知つたが、その村人達が何処へ転居したか不明で、尋ね歩いているが尋ね当たる事が出来ずにいる。せめて小底の婆さんでも存命中であればと残念。私が知つている浦内村唯一の古謡で後世のために記しておくことにした。

- イニガタニアヨー 稲が種子アヨー
 一、イニガタニ イキディクーヨー 稲種よ落ちこぼれなく芽を出してくれ
 ケーラマイ 皆の稻よ
 イトウバホーベー トウラレソーヨー 糸がもつれるように給われよ(繰り返し)
 二、ナシルダニ タニウリダニ ウルシヤル 苗代田に種をおろし田に蒔いた稻の種よ
 三、シタカイヤ シルニヤウリ 下のほうには白い根が
 ウイカイヤ ヤバパムイ 上のほうには若芽が萌えて
 トウンディクーヨー 萌え出してこい
 四、インヌキニ マヤヌキニ マサラシ 犬の毛猫の毛よりもまさつて
 五、ナリフドウヌ タキフドウニ スユラバ 実るほどに丈高く太くなれば
 六、ナシルダカラ ヤシキカラ 苗代田から苗代田の樹から
 トウリナシ ピキナシティ 取り束ね引き束ねて
 トウラレソーヨ 給わるよ

七、タバルカチ マシヌカチ イビオラバ 田原毎に田んぼ毎に植えたらば
 八、バガイビヌ クリヤサシヌ ニカヌユヤ 私が植えた念入りに差込んだ苗が今夜の
 九、カンヌミジ ヌシヌミジ アモーサバ 神の恵みの雨水守り神の雨水に湯浴みし
 て

- 一〇、ウルチムヌ バガナチヌ ナリヨーラバ 陽春の初夏になつたら
 一一、ユシキダキ イバイダキ ススキのようにチカラシバのよう
 ムトウミヨーリ 稔強く根を広げ
 一二、イディブリヤヌ ナリブリヤヌ
 ナリヨーラバ 稔が出る時に稔る時分に
 一三、ウブブダニ ナープダニ タボラリ
 一四、イシヌミニ カニヌミニ
 マサラシ 大きい穂に長い穂にして下さい
 イトウバホーベー イシニヤグヨ 石よりも鉄よりも堅く
 締つた実にしてください
 糸がもつれるよう石の堅さのよう

イニガタニアヨーの解説

苗が犬や猫の毛のようにふさふさと生育し、田原毎の田んぼに植えられ、鳥獸の害もなく育ちが順調で出穂期には、根もチカラシバのように四方に張り、根強く、茎もススキのごとく太く強くして倒伏もせずに生え揃い、穂は長く大きく、粒はぎっしり根元から穂の先まで揃い、収穫が出来て豊年万作をもたらしてください、と稻の生育の段階を踏まえて祈りを込めた歌をうたう。

- ナカザラ (舟浮村)
 一、ナカラザヌ ウミシャグ 中皿
 ウヤシバドウ ユーナウレ 召し上がつてこそ世は治り豊年を迎えられ
 る
 ウヤキ ユウナウリヤ ユウナウリヤ (囃子)
 二、ウヤキ ナカザラユ 豊年の中皿のミシャグは呑んで
 パヤシバドウ ユナウレ 囉してこそ世は治る
 三、ニウスイヌ ウミシャグ 役人も百姓も差別なく呑むミシャグを
 ウヤシバドウ ユナウレ 召し上がりこそ世は治る
 四、ウヤキ ニウスイユ 役職の者も百姓も共々に呑み交歓して
 パヤシバドウ ユナウレ 囉してこそ世は治る

ナカザラの解説

他の西表の村同様、昔は干立村にも中皿、角皿の歌謡があつたと思われるが、残念のことに今まで伝承されていない。ただ、ミシを中皿や角皿に注ぐ容器のバダシだけがあつたと言われている。そこで、参考までに、現在舟浮村で歌われているものを収録しておきたい。

ミシャグは、昔は、生米とご飯を乙女が噛んで発酵させた酒で、ミシとも言った。現在では、米を水に浸して摺り鉢で摺り、粉にして水とまぜ、発酵させて造っている。舟浮村

では、中皿と角皿は、御嶽の氏子が勢ぞろいしたミヤの広場（カザリバ）で歌うものである。ミシを入れたバダシという容器を捧げもつた者と、中皿、角皿を捧げもつた者の二人で、ミシを注いで、まず、神司とチジビに捧げる。これをうけた神司、チジビは、中皿の歌にあわせて中皿の盃を敬虔に身体の右上に左上にと捧げて口を付けて飲む。このあと、ミシをつぎたしながら、来賓氏子一同にもれなく行き渡るようにして中皿角皿の儀式を終える。三句、四句にでてくる「ニウスイ」というのは、はつきりわからない言葉だが、二^{II}根、スイ^I末と解釈すれば、「根から末まで」という意味として解釈している。三句目は「土族も平民も差別なくともにミシャグをいただいて」という意味である。

チヌザラ

- 一、キユヌピバ ムトウバシ
ムトウスイ ユウナウレ
ムトウスイナウレ マモリタボレ
二、クガニピバシ ムトウバシ
三、フシタティムラ ウイナカ
四、フクイムラ ンナカニ
五、ミリクユバ タボラレ
六、ノーリユバ タボラレ
七、ミリクユヌ ウニガイ
八、ノーリユヌ ウニガイ

角皿

- 今日の日を 元にして
根も末も 穏やかに
(囁し) 根元も末も差別なく お護り下さ

- 黄金のような吉日を 元にして
干立村の 全域に
福徳村の 村内に
弥勒の世を 紿つて
稔りの世を 紿つて
弥勒の世を お願いしよう
稔りの世の お願いしよう

チヌザラの解説

千立村では、ミシ入れをバダシと言う。ここでは、舟浮村の祭儀を書いた。当千立村では、中皿、角皿、バダシの祭具もなく、中皿も角皿も戦後歌われなくなつて久しい。このままでは、何十年か後に、この祭儀も忘れざられる違ひない。なぜ中絶してしまつたのか、その理由は不明で、昔からの床しい風習が失われたことは遺憾至極である。ぜひ復活したいものである。

一口囁子「グマピトウタイ」	(浦内村)
一、グマ ピトウタイ グマ ピトウチャ	胡麻一束 胡麻一 胡麻二束 胡麻二 胡麻三束 胡麻三 胡麻四束 胡麻四 胡麻五束 胡麻五 胡麻六束 胡麻六 胡麻七束 胡麻七 胡麻八束 胡麻八 胡麻九束 胡麻九 胡麻十束 胡麻十
二、グマ フタタイ グマ フタチャ	
三、グマ ミータイ グマ ミーチヤ	
四、グマ ユータイ グマ ユーチヤ	
五、グマ イチタイ グマ イチチャ	
六、グマ ムータイ グマ ムーチヤ	
七、グマ ナナタイ グマ ナナチャ	
八、グマ ヤータイ グマ ヤーチヤ	
九、グマ クヌタイ グマ クヌチャ	
一〇、グマ トウータイ グマ トウーチヤ	

一口囃子「タイピトウタイ」（浦内村）

一、タイ	ピトウタイ	カイ	ピトウラ	炬火一束	蟹一匹
二、タイ	フタタイ	カイ	フタラ	炬火二束	蟹二匹
三、タイ	ミータイ	カイ	メーハラ	炬火三束	蟹三匹
四、タイ	ユータイ	カイ	ヨーハラ	炬火四束	蟹四匹
五、タイ	イチタイ	カイ	イチハラ	炬火五束	蟹五匹
六、タイ	ムータイ	カイ	モーハラ	炬火六束	蟹六匹
七、タイ	ナナタイ	カイ	ナナハラ	炬火七束	蟹七匹
八、タイ	ヤータイ	カイ	ヤーハラ	炬火八束	蟹八匹
九、タイ	クヌタイ	カイ	クヌハラ	炬火九束	蟹九匹
一〇、タイ	トウータイ	カイ	トウーハラ	炬火一〇束	蟹一〇匹

一口囃子の解説

この囃子は、一口一息で一番から十番まで囃さなければならぬもので、不出来の時は罰として湯飲み一杯の酒を一息で飲み干さねばならず、酒好きの人は喜んだ。酒の呑めぬ人、嫌いな人は呑みあぐねて泣く人、逃げ出す人もあつた。種まきのヤーマチ（謹慎）終了日の酒座の座興であつた。アヨウ、ユングドウなどいちおう済んだ後、次の家に立つ前に囃された。今では囃さなくなつて久しい。少年の頃、浦内村在住の折、見聞したものである。参考までに記した。

ターウビジハラバ

一、キユヌピバヨ クガニビバ

シラビヨーリヨ

サーユイサヌ

シユーラヨイース

ユバナウレ

二、ウヨンダバヨ イビチャルヨ

三、バガイビヌヨ ナガマシバ

ニカヌユヤ

四、カンヌミジヨ ヌシヌミジ

アモウサバヨ

五、シタカイヤヨ シルニヤウリ

ウイカイヤ ヤバパムイ

六、ウルチムヌヨ パガナチヌ

ナリヨーラバヨ

七、ユシキダギニヨ イバイフサニ

ムトウミヨーリヨ

八、イディブリヤヌヨ ナリブリヤヌ

ナリヨーラバヨ

田植えジハラバ

今日の日を黄金のよう

良い日を選んで

（囃子）

世は治れ

祈願する田の長い田に

植え付けた

私が植えた差し込んだ

稻苗は今夜の

神様の恵みの雨、守り主の雨を

浴びて

根元には白い根がはえ

上には若葉が萌えでて

陽春の若夏に

なつたら

スキのようにチカラシバのよう

根を広げて稈を強くして下さい

穂が出る時期、稔る時期になつたら

九、ウブプダニヨ ナーポダニ
タボラルヨ

大きな実を長い穂を
賜りますように

一〇、イシヌミニヨ カニヌミニシ
タボラルヨ

石のように鉄のように堅い実を
賜りますように

一一、ウヌカフドウヨ クヌニガイ
ニガユルヨ

この果報をこの願いをこめて
祈願します

ターウビジラバの解説

このジラバは、田植えを終えて家に帰る道すがら毎日歌われる。ユイに参加した人も賄い人も揃って、自然に二分され前半の者が歌い出し、中途から後半の者が歌う。ちょうど二部合唱のように歌われる。西部幹線道路の中途中にあつた「アハマラ石」あるいは「アハラ石」ともいう石は、牛が寝たかっこうの砂岩で、作業を終えて帰宅する者の休憩地になっていた。足の早い若者達はここで老人や足の遅い弱い女達を待ちあわせ、勢ぞろいして帰った。この岩も、幹線道路の開削で破碎され、なくなつた。干立村の歴史を見つめてきて、休憩地になつていたこの砂岩は、破碎されて泣いているだろう。

稻作にあたつては、種子取り（種おろし）のヤーマチで謹慎して苗の生育をひたすら待ち望んで、やつと田植えにこぎつけ、ほつと息抜く暇もなく、田植えをして後の水加減、管理、除草、害鳥害獸対策などが待つていて。手をつくして足りない所はやはり神仏の加護を祈るしかなく、かくあれかしと祈願する百姓の気持ちは諒とすべきである。そして、このジラバはそうした百姓の願望を余すことなく歌つている。

グジンフ

- 一、クトウシ ムジクイヤ
アンチュラサ ユカティ
クラニ チミアマチ
マジン サビラ
- 二、フバナ サチチリティ
キジンサビン ネーラン
シラチャニヤ ナビティ
アブシマクラ

グジンフの解説

これは、沖縄島のマジンのグジンフをそのまま借用している。

マジンは沖縄の方言で、稻叢のことである。干立村の方言では、シラと呼んでいる。在来米は庭に束にして積んでおき、必要に応じて抜き取り、精米、精白した。

御前風

今年の作物は
例年に増してすばらしい
蔵に積み余して
稻叢（マジン）にしておこう
稻穂の発芽もよく
何のさしさわりもなく
みのつた稻は揃つて
畦を枕にする程だ

ヤラヨー

- 一、ヤラヨイ タキバルヌ フクラニ
ヤラヨイ （くりかえし）
- 二、ヤラヨイ フシタティヌ ンナカニ
ヤラヨイ ミリクユバ タボラリ
- 三、ヤラヨイ ユガフユバ タボラリ
ヤラヨイ ミリクユヌ ヨイドウス
- 四、ヤラヨイ ユガフユヌ ヨイドウス
ヤラヨイ ユガフユヌ ヨイドウス
- 五、ヤラヨイ ユガフユヌ ヨイドウス
ヤラヨイ マブルシュン メヒンダラ
- 六、ヤラヨイ ユクンダラ
カルヤシユン ユクンダラ
- 七、ヤラヨイ マブルシュン メヒンダラ
カルヤシユン サカリヨーラ
- 八、ヤマニンズン サカリヨーラ
- 九、ヤマニンズン ブドウリヨーラ
- 一〇、バガケーラン ブドウリヨーラ

嵩原（旧名）の村内に

干立の村中に
弥勒の世を賜った
世界報世も賜った
弥勒世のお祝いをしよう
世界報世のお祝いしよう
守り本尊もひとしおだろう
加護を賜る神もそれ以上だ
お嶽人数一同榮えよう
我等一同も踊りましょう

アパレ

- 一、アパレ タキバルヌ フクラニ
二、アパレ フシタティヌ ンナカニ
三、アパレ ミリクユバ タボラリ
四、アパレ ユガフユバ タボラリ
五、アパレ ミリクユヌ ヨイドウス
六、ユガフユヌ ウニガイ
七、マムルシユン メヒンダラ
八、カルヤシユン ユクンダラ
九、ヤマニンズン サカリヨーラ

嵩原（旧名）の全域に

干立村の村中に
弥勒神が御出て豊作だった
果報の御世を賜つて豊作だった
弥勒神のお祝いをしよう
果報を賜うようお願いします
守り本尊もひとしおだろう
加護を賜る神もそれ以上だ
お嶽人数たちも栄えさせてください

一〇、バガケーラン ブドウリヨーラ
 一一、ガラマヌキ ヌキショーラ

我等一同も踊りましよう
 勾玉も首にかけて踊ろう

ハヤツサ

豊年祭の旗頭の道行き歌

一、タキバルヌ フクラニ ハリ

嵩原村の村中に
干立村の真ん中に

二、ミリクユバ タボラリ ハリ
 ユガフユバ タボラリ

嵩原村の村中に
干立村の真ん中に

三、ミリクユヌ ヨイドウス ハリ
 ユガフユヌ ヨイドウス

嵩原村の村中に
干立村の真ん中に

四、マブルカン サニシャル ハリ
 カルヤカン サニシャル

嵩原村の村中に
干立村の真ん中に

五、ヤマニンズン サカリヨーラ ハリ
 バガケーラン ブドウリヨーラ

嵩原村の村中に
干立村の真ん中に

ハヤツサの解説

ソージヤというのは、古い屋号のひとつ。ウスマイは、士族のおじいさんへの敬称であるが、なぜこのように囁すのかわからなくなっている。

ソール（お盆）の歌

千立村のソール念佛（無感念佛）

鳩間島の伝承を参考に六番の欠落の補正を試みたもの

- 一、親の御恩は深きもの
父御の御恩は山高さ
母御の御恩は海深さ
二、山の高さや探からん
海の深さん探からん
昼は父御の膝が上
三、扇子の風に煽がれて
夜は母御の懷に
十重も二十重も衣裳の内
四、濡りる方には母寝て
乾らぐ方には子ゆ寝して
諸共濡れれば胸の上
五、是程親に念われて
年や一〇、二〇才になゆれ共
親の御恩は未だ知らん
六、命ゆ捨て体朽ち果てて
散りての後ど哀知る
散らなみらりば哀りなし
七、大白星の上りば門に立ち
日元の下りば辻に佇ち
我親待てども待ち兼ねる
八、島の島々廻れ共
國ノ浦々参れ共
我親似る人拝まらん
九、アサギの浜迄参れ共
猿搔き山ば押し分けて
青苔生いたる墓標
一〇、其晩や墓場に仮寝とり
其晩の夜半に夢拝て
二人の親の現りて
一一、寝覚に探りば父も無し
飛び起き尋りば母も無し
父呼び母呼び声すれば
一二、声あるものは山響
再度ものにだまされて

之程浅間しき事はなし

一三、それから我家に立帰えり

父御の形見を取り開き

母御の手束取り眺めて

一四、それ見る涙の止まらん

諸袖濡れば腕流し

行く人来る人哀れがる

其様なる事には親のためとなる。

念佛句（鳩間村）

これは鳩間村に伝承されているものの冒頭部分である。

一、ウヤヌウグヌハ フカキムヌ

チチグヌウグヌハ ヤマタカサ

ハハグヌ ウグヌハ ウミフカサ

二、ヤマヌ タカサヤ サバカラソ

ウミヌ フカサヤ サバカラソ

ヒルハ チチグヌ アシガウイ

三、オンギヌ カジニ アウガリティ

ユルヤ ハハグヌ フトウクルニ

トウイムハタイム キヌガウチ

四、スリルカタニハ ハハヌ ニティ

カワクカタニハ クユニシティ

ムルトウム ヌリリバ ムニガウイ

五、クリフドウ ウヤニ ウムワレティ

トウシハ ハタチニ ナレドモ

ウヤヌ ウグヌハ マダシラン

六、チリテン ミテクシン

アワリシリ
チリラナ ミラリバ アワリナシ

哀れを知り

散る所を見れば哀りなし

親の御恩は深きもの

父御の御恩は山高さ

母御の御恩は海深さ

山の高さは捌かれぬ

海の深さは捌かれぬ

昼は父御の脚が上

扇の風に煽がれて

夜は母御の懷に

十重も二十重も衣裳が内

濡れる方には母が寝て

乾く方には子を寝して

諸共濡りば胸が上

是程親に思われて

年は二〇才になれども

親の御恩は未だ知らん

（不祥）

以下は干立や祖納の念佛と同じなので省略するが、特に第六句は祖納、干立の両村にはない句があるので、注意したい。

ソール念佛の歌詞の解説

ソール念佛は故小底ブナリさんと故糸数寛次さんより聞き書きした。昭和四三、四年の事である。六番の後句「チラナミラリバアワリナシ」は覚えているが、「歌い出しの句を忘れ思い出せない」との事であった。兄弟の七月念佛「ルクシャ、ルクユ」七日七夜の二句が欠落している事が判り、本歌六番の「チリテンミテクシン アワリシリ、チラナミラルバアワリナシ」は欠陥のまま鳩間村に伝わっている事が判った。口こみの伝承で欠落は止むを得なかつたと思う。そのままでは解釈出来ないので、義父美佐志加那の存命中に欠

落部分の意見解釈を求め、欠落部分の補完を行った。「チリテン」は命を失う事で「命を捨て」と解し、「ミテクシン」は身の朽ちる事が妥当であろう、とした。そう解すれば、次の「アワリシリ」に素直に繋がる。「チラナミラルバアワリナシ」は正常でそれで良く、「命が亡くなり身体が朽ち果てれば現世の非情さが、死と言う現実が無ければ哀れさはない」つまり「ヌチシティミクチハティティアワリシリ」「チラナミラルバアワリナシ」と解した。然し此の解釈が正しく欠落部分を補うものだと押し付けるつもりはない。人それぞれの解釈は自由であるからだ。なお鳩間村には他に兄弟の七月念仏がある。叔父寛次さんの存命中ソール（お盆）毎に唄っていたので書き取ったが重複が多く欠落部分がある様で意訳出来ず途中で投げ捨てた。後日昭和五四、五年の頃と思うが、鳩間島より兄弟の七月念仏を送つてもらいその全容が判り本歌の脱漏部分も補う事が出来たのは幸いだった。ソール念佛と兄弟の七月念仏は不離一体と思われる、ディンサ節と共に上原村が発祥の地だ、と義父美佐志加那はプレー家の大浜正良爺から聞かされたという。

兄弟の七月念仏は幼く貧しい兄弟に託して唄われ、貧しい故にお寺参りの供養を拒まれ野山の木の実、生り物を取り集め、甘蔗の梢末を生花に残りを方寸に切り束ね件の果実等を之に差し祖靈を迎え、且つ外棚をしつらえて瓜や茄子、紫蘇葉を切り刻み揆き物として備え置き悪鬼惡靈や供養する者の断えた亡者等の集まり来るのを之で揆き払い、六日六夜にわたり書き上げた経文を、七日七夜かけ詠み上げ供養したと。

七月念仏に唄われている木の実や成り物等を供える風習は今でも受け継がれて来ているが、それを唄つた肝心の七月念仏の兄弟の句が干立祖納の両村に何故か伝承されていない様で不思議に思う。その原因は不明である。

戦後二三、四年頃黒島寛松さんが念仏を書きプリントして青年に唄わせ、途絶えていた踊りも復活させた。しかし同氏の念仏は、口こみの欠陥から六番や兄弟の念仏句を落としていたのであつた。もちろん、私が六番の欠陥句や脱漏の二句のあるのを知ったのは鳩間村よりの念仏句送付によつてではあつたが、せつかくの復活の時にお年寄り年配の方達も欠陥や脱漏を正してくれなかつたのは残念でならない。

欠陥脱漏を正して兄弟の念仏句も採録した本来の姿に戻したいものである。

七月念仏、兄の句（鳩間島）

南無阿弥陀仏よ弥陀仏

- 一、ナムアミダブチヨ ミダブドウキ
イマジュウサンナルヨ チグデインシ
アヌヤマディラニヨ マイラシバ
- 二、ムチユルタカラヌヨ アリバドウス
ムチユルタカラヌヨ ネナヤリバ
アヌヤマディラニヨ マイラサヌ
- 三、ムヌヌナチカシヨ ナチヌヤマ
フンニヨ アワリヌムヌ ヤリバ
ニシカインカユテヨ キヨウモンバカキ
- 四、ヒガシニ ムカユテヨ キヨウモンバユミ
ユムダル キヨウモンヤヨ チチヌタミ
カキダル キヨウモンヤヨ ハハヌタミ

本当に憐憫の者があるので
西に向つて経文を詠み
東に向つて経文を書き
詠んだ経文は父のため
書いた経文は母のため

五、ウキトウリ タマワリヨ チチヌウヤ

ウキサシ タマワリヨ ハハヌウヤ

ナムアミダブチヨ ミダブドウキ

受けとつて下さい父の親

南無阿弥陀仏よ弥陀仏

南無阿弥陀仏よ弥陀仏

七月念仏、弟の句（鳩間島）

一、ナムアミダブチヨ ミダブドウキ

ワリラガユニンナルヨ イヤシングワース

アヌヤマデイラニヨ マイラサナ

よう

二、ムチュルタカラヌヨ アリバドウス

ムチュルタカラヌヨ ネナヤリバ

アヌヤマデイラニヨ マイラサヌ

三、フンニヨ アワリヌムヌ ヤリバ

ニシカインカユテヨ キヨウモンバユミ

ヒガシニ ムカユテヨ キヨウモンバカキ

四、ルクシャルクユニヨ カキアギティ

ナンカナナユニヨ ユミアギティ

五、カキダル キヨウモンヤヨ チチヌタミ

アマリニ ワウヤヌ カナシサニ

ソーローヤ イチガディ タンヌリバ

六、ソーローヤ シチガチ ナカヌ ソーロー

キヌナリ パチパチユ トウリカザリ

ナリムヌ シナジナヨ トウリスルイ

七、ウジヌ スラスラヨ イキバナニシ

ウリ ナシピヨ キザミティ パンキムヌ

ウジキリ ムスピティヨ ウヤニマイラシリバ

えすれば

八、スレデモヨ ウヤヌタミトウナル

ウキトウリ タマワリヨ チチヌウヤ

それでも親の供養になる

お受けとり下さい父の親

ウキサシ タマワリヨ ハハヌウヤ

九、ウグヌ ハナヌ ミジン スイ

お供えの生花の水も添えて

シソヌパンキヌ ミジントウムニ

紫蘇の撰の水と共に

スクタル チヤミジンヨ クブスユカ

残った茶湯の水も床下に零し

一〇、フカヤヌソーローヤ ソーローヌタミ

外棚のソーローは無縁仏のため

ウキトウリタマワリヨ ミダブドウキ

受け取りください弥陀仏様

ナムミダブトウキヨ ウクリンディムヌ

南無阿弥陀仏にお送りします

ソールのアンガマ

ソールにはアンガマが伴う、後生の祖靈がアンガマに化身して現世に來り子孫と交歓し

南無阿弥陀仏よ弥陀仏

我等が四人の貧乏人の子が

父母の供養のためにあの山寺に参詣し

財貨をもつてゐるならばよいが
持つてゐる財貨が無いので

あの山寺に参詣供養できないと
本当に憐憫の者があるので

西に向つて経文を詠み

東に向つて経文を書き

六日六夜に及び書き上げて

七日七夜かけて詠み上げて

詠んだ経文は父のため

書いた経文は母のため

余りにわが親の懐かしさに

精霊日は何日かと尋ねれば
精霊日は七月中日の精霊日

木の実の初物を取り飾り

成り物の品々を取り揃え

甘蔗の茎の末を生花にし

瓜茄子を刻んではじきもの

甘蔗を切つて結んで親にお供

親密さを深めて踊る。その踊りは昔は屋内と庭先に分かれていた。屋内は士族、庭先は平民という階級意識があった。戦後一時期までは各戸屋内で踊られ、大変賑やかであった。お面をかぶり、男性が女性の、女性が男性の恰好をして踊りの輪に途中飛び入りしてくるが、平素見慣れているものでも、それぞれ違った恰好をして入り交じるので、誰が誰かその見極めが大変で、お面をとつてはじめて「なんだ」という具合だった。

賑やかだった盆踊りも、若者たちが職を求めて遠く本土や沖縄本島に転出し、今では最盛期の一〇分の一に人員は減っている。過疎化の波には勝てず、今では各戸への訪問供養は取り止め、公民館広場で旧来の屋内と庭先の部分を併せ、しかも一夜だけで済ませている。

ソールのアンガマの所作

太鼓は男子受け持ちで太鼓を据え膝を屈居し、体を左前方に移しながら右手の枹で打ち捨て、体を戻し左足を伸ばしながら左手の枹で打ち右下方に流す。その際右手の枹は右上方、左手の枹は右下方にある。

サンピキは専ら女子の受持で左手指に掛け下げ、指の開閉で打ち鳴らす。左斜め前に体を移しながら掌をサンピキの下の掌を上に返し、元の姿勢に戻りながら左足をやや伸ばしてサンピキの上で掌を下に返す。サンピキ、太鼓共念佛歌の三味で拍子をとり踊るのが肝要で各戸に訪れこれを行う。道行きには「ホーホ」と唱え団扇を斜め上方に突き出し戻したら道行きし次の家に向かう。

干立村のシチ祭

シチ祭のあらまし

シチ（節）祭は西表島の西部地区の祖納、干立の両村では巳亥（つちのとい）の日が取り付き（始まり）である。ところが、舟浮、網取、崎山の各村では一日遅らせて行つたという。これは、役人の都合思惑でこうなつたものの様である。

節祭取り付きの夜はトウシヌユー（歳の晩）といつて年越しの振る舞いをいただく。翌日の庚子（かのえね）の日に、諸行事が干立御嶽のミヤ（中庭）で行われる。平民の干立御嶽が平民のみの御嶽になるまでは、上の御嶽でとり行なわれて来たようであるが、干立の人々が個人の御嶽を拝むようになつてからは、このような習慣になつてている。この祭は、最も重要かつ厳肅な行事であつて、昔は親が死んでも葬式は出せず、行事への参加が義務付けられたというたいへん大事な意味を持つ祭祀であつた。昔は平民のみの神事で、士族の人々は招待を受けて、祝宴に列席する習わしであつた。

節祭の神事が午、寅、酉の神年に当たる時はキチガン（結願祭）があり、舞踊や狂言等の村芝居が奉納される慣例で大変賑わつたという。キチガンは大東亜戦争後は行われていない。

節祭の準備と年越し

往昔は巳亥（つちのとい）の日を年のけじめの日とし、翌庚子（かのえね）の日を年初の日としたらしく、巳亥の日の夜は、方言でトウシヌユーつまり年の晩と称して家内一同

の健康息災を祝い、年越しのフルマイ（振舞い、御馳走のこと）を戴く。

風波に揉まれ枝折れし碎片となつて干瀬に打ち上げられたサンゴのかけらをナラ石（ナライシャ）というが、年越しの晚までにこれを浜から持ち帰り、三味線蔓草（和名イリオモテシヤミセンヅル）を取り寄せ準備し家の守り神であるヤーカザシを始め、主な柱、臼、杵、鍋、釜、簞笥、長持等に結わえ付けて占有を示し、清めとする。続いてナラ石で床の間より屋内四隅の悪靈、亡者を払い屋外に追い出し、屋敷内東西南北くまなく払い、門口より追い落として悪靈亡者が屋敷内に戻り入らぬようナラ石で門口に一条の線を引き置く。こうして心身を清浄にし、年の夜を迎える年の無病息災をヤーカザシ、火の神に祈願し、祖先の御靈にも礼拝し年忘れをする。

節祭——式次第の概要

パーリヤ舟を漕いで、ミリク世を漕ぎ寄せる行事が、節祭の中心であるが、前日から当日の午前中に年配の方々が中心になつて旗頭の飾り付け、化粧直しを行なつて、節祭に支障のないようにする。また、潮時を考え、満潮になる前の時刻迄にそれぞれの家から御嶽に参集する。村の幹部は、青年の応援を得て会場の設営をし、婦人たちは神様へ供える料理と招待客のための料理を準備しあえ、神司、チジビに連絡をして潮時を待つ。神様に供える料理は、この項の末尾に記載してある。

一、ヤフヌティ

オイサーのウダチ（公民館下）から干立御嶽前までの浜辺で行う。

二、パーリヤ舟おろしとミリク神迎えの神事

舟おろしとミリク神（粟神）をお迎えするためにトウチ（船頭）は干立御嶽の神前に参り、チカラグシ（力神酒）を頂いたあと、乗船する。

三、祈願パーリヤ

舟子が舟のジラバを唄い舟出し、粟神のミリク神迎えの神事に移る。

四、節祭終了後のトウリムトウ（戸根元）への司供奉

ササラニシの通行吉歌を歌い、旗頭を先頭に踊らせながらチカ（神司）とチジビを送り、トウリムトウ家のヤーカザシに棒技を二、三點奉納する。

御嶽のミヤで行う狂言棒技

一、ティンジヨティンパイ

二、アンガマ

イ、キユヌフクラシヤ

ロ、グサクティ

ハ、グゴパ

ニ、フニスク

三、狂言

イ、パチカイ

ロ、カビラ・パチカイ

ハ、ウシウイ狂言

四、ミリク菩薩のミヤ巡回

旗持ちの少年がミリクの両袖を持ち、供奉しミリク節でミリクの眷族（婦女子、男子の芸人）が参加、銅鑼、笛で音頭をとりながら広場を一巡する。

五、獅子舞

銅鑼、横笛で獅子を踊らせる。出場の笛と舞、踊らせるときの笛、及び退場の笛の奏し方はそれぞれ異なる（西銘次郎さん談）。西銘さん住郷中は同氏が奏したが、後を継ぐ人がいないので、出場、退場の笛は今のところ奏者がいない。棒技・獅子舞の時は、前鹿川徹夫さんが踊りの笛を奏している。

これで節祭の行事を終える。翌日、村建て当時より各家に掘抜き井戸のできるまで使用した水元のウイヌカー（上の塞井戸）とアダヌカーの塞井戸の浚えをし棒枝を二、三点奉納し各戸を訪れ惡靈払いをする。この井戸浚えには必ず獅子頭を先頭にしてゆく。

- 一 ダイグクヌミリク バガシマニ イモリ
クトウシカラ バガシマ ユガフデムヌ ユガフデムヌ
サーサーユーヤサ スリサーサー
- 二 クトウシユヤミリク ヤイヌユヤ ユガフ
ミティヌユヤ メヒン マサラシタボリ マサラシタボリ
- 三 ウスカジヌクガニ ミリクユヌ ウカギ
ウスカジヌタントウ チカシタボリ チカシタボリ
- 四 ミリクユヌイモリ ユガフユヌ ウカギ
キレムヌフナチン スルユティ ブドウリアシバ ブドウリアシバ

五、獅子舞

節祭の由来と穀御嶽

節祭の来歴は判然とせず記録もない。穀御嶽は義父美佐志加那の談によれば、八重山に伝來した五穀のうち粟種が一番早く伝えられ、干立村がその伝來地で北岸道路白浜線より村に入る右側にあるスーカー（潮井戸）の御嶽に粟種を持ち来たった祖先が粟の神として祭祀され、八重山群島唯一の粟の神として鎮座なされている。

幼くして父を失い、母が実家に去った後は、祖父母に育てられた。程なくして祖父母も後を追つて亡くなつたので、美佐志の二男スシメの稻福筑殿之に養育され成長し美佐志家に戻り、祖父母の遺命を守り、四、五年の隔年で牛馬を屠り西方支那大陸、粟の渡来地に酒肴を整え祭祀を欠かさなかつた。詳しく聞くことが出来なかつたが、ウシマ世の中国大陸からミリクをお迎えするというパーリヤの神事は、この故実に由来しているだろうと、子供ながらも聞き覚えていたと、故美佐志加那は話していた。

唐、南蛮焼きの皿小鉢が美佐志家の墓所に破損散乱してあるのを見かける。高さ八寸程の仁王佛が庭前に安置されお茶湯を欠かさなかつたが、戦後のどさくさで何時ま

にかなくなり、床の間に飾つてあつた二頭の龍が抱いて眼光鋭く今にも昇天するような南蛮焼きの花瓶があつたがこれも行方不明になつてしまつた。

北岸道路開設の際、干立村に入る道路も拡張された時、粟五穀の神として信仰されたイビが、ブルドーザで押し除けられて所在不明になつた。その後、昭和五三年、美佐志家の三姉妹の発願で、新川在の崎枝太郎さんの祈祷努力により発見確認されたが、元の位置に返されぬまま屋敷内の東南側のアカギ（赤木）の根元に安置され、三姉妹だけで祭祀している。

オホホ考

此の節祭行事の中にミリク神のミヤ巡回がある。氏子の婦女子がミリクの眷族として参加し、これに男子の芸人數、パーリヤの舟子の一四、五人が加わる。このミリクは浜辺での豊年祈願のパーリヤ（爬龍船）でウシマ世から粟種を持ち来て各村に広く栽培せしめた祖神を弥勒菩薩の神として迎えられ崇られて干立村に臨場された証であり未來の富貴を展望したものといえよう。ミリクの巡回の途中出て来てこの行列に絡む道化者が「オホホ」で金銀珊瑚の財宝を入れた袋を肩にしている。此の財宝でミリクの眷族の女達の歓心を買おうとして誰彼となく近寄つて行き、身振り手振りをして財宝を持つてゐるの仕草をし己に靡かそうと懸命になるが、言葉が言えず意志が通じぬため「オホホ」とのみ連呼し財宝を叩いて何回となく言い寄つて、時たま女子の手を握り引き寄せるが相手にされず無視されてとうとうミリクの行列は去つてゆく。その後ろ姿を呆然とし、啞然として見送る姿格好は哀れで滑稽である。諦めて財宝袋を地におろし今までのものどかしさ、靡かぬ惜しさを振り切るよう可笑しく剽輕に踊りだし満場の人々の爆笑の中に退場する。「オホホ」の面貌は鷲鼻で高くとんがり、髭も八の字形で目眉も垂れ下がつていて、どう見ても異人にしか見えない。古老もウランタ人だと言つてゐる。この異人の絡みが長い間疑問で何故異人がミリクの行列に絡むのか。そのいわれはと色々思い悩み、考えあぐねていた。

オホホの由来については、これ以上の伝承がないが、次に示すように一六三〇年頃に、西表島への南蛮船の漂着があり、乗員が上陸したとの記録がある。想像をたくましくすれば、その漂流者が生き残り、島に住み着いて村に同化し、たまたま節祭にあたり好奇心で、ミリクの行列に絡んだのではないか。それが行事に盛り上がりを見せて面白おかしくし、それ以降、行事毎の出番となり、後世に伝えられて現在まで続いてきたものとも考えられる。

干立のりつぱなウランタ墓

一九九〇（平成二）年一一月「マラケ」と「ピサッサ」の先祖の焼骨があり、その手伝いに行つたおり両家の墓の中間にすこぶる珍しい墓が見受けられた。聞いたところ「ウランタ」の墓などの事で造成年代も相当に古くほとんど崩れ落ちている。粟石を切り出し三方を囲い外側より珊瑚礁のカサ石で積み上げ土で被せてある。当時としては特別丁寧に作られた模様だ。私が知つてゐる遭難で流れついた「ウランタ」人の墓は海辺近くの兼久（砂）地に穴を掘り遺体を埋め、カサ石を乗せただけのお粗末なもので、辛うじて墓だと認められるものだが、この墓は相当の日時および手間隙をかけてあるようでこの異人に対する村人達の愛惜が特別であつた事がうかがい知れる。

一六四〇（崇禎二三）年、「王代記」より一〇年前、西表島に南蛮船の漂着があり、八〇

名程上陸したと『八重山歴史』に見える。（「異国船漂流記」）

遭難者のウランタ人墓は、浦内のイロチ、宇那利崎のニシコチ、多柄のナーニ等の兼久地に見えた。古老もウランタが遭難して流れ着いた者の墓だと教えてくれた。王府は検視のため役人を派遣したが八重山に到着した処三、四日前出航したとの事で同年中秋に帰府したとの事である。想像を逞しくすればその南蛮船の乗員が病いか負傷で取り残され、村に住みついたのではないか。昔は西洋人を総てウランタピトウ（オランダ人）と言つていたという。

フードウはウランタの言葉ではないか？

フードウと言う木の実がある。果実に比べて種が大きめの中は空洞で甘く美味しく香ばしい。酒に漬ければ風味があつて捨て難い。この言葉は西欧では果物を指すという。この方言は今まで何の疑念もなく方言として子供の頃から馴れ親しんできたが、此処にきて何かしら引懸かるものがある。ひねつて考えれば異人が残した言葉でないか。それが方言として残つたのではないかと思われる。

オホホはウランタ人であろう

村に住みついたウランタは当座色々と思惑がありなかなか村人と馴染まずに居た筈だが、年を経るにつれ村人達の暖かい愛情と包容に支えられ溶け込み、至極平穏無事に一生を終えたであろう。私が見たあのウランタ墓はその証しに違いない。言葉が言えぬもどかしさ、意志疎通が計られぬ辛さ、村に溶け込もうとする熱意、おこがましくも財宝を以て婦女子に言い寄る様、その面貌の特異さ、身振り手振りの可笑しさ等を当時の気の利いた知恵のある人が、大黒様にもじつてミリクの行列に絡ませ可笑しく面白く仕立てたに違いない。

以上は私の考察である。記録も伝承もないので独断の誇りは免れぬが面貌の特異さ、言葉の通じぬ模様や、財宝を沢山持つている事等を勘案すれば、そうとしか考えられない。

浦内から来た「ダドウリツタ」の芸能

浦内村は昭和七、八年頃、最後の一軒の宜間蒲太が干立村に引っ越し事實上廃村になる。同村の銅鑼、証鼓各一個村人達が干立村に持ち来たつたが、銅鑼は破損、証鼓は有ると思われるが不明である。浦内村では獅子頭がないので「ダドウリツタ」といつて女子の剽輕者が出て口を尖らし目眉をしかめ面貌を可笑しくし、人差し指を伸ばし左右交互に腕を曲げ伸ばしては飛びはね獅子の真似をした。干立村ではこの「ダドウリツタ」を獅子舞に絡めておもしろおかしく演じている。浦内村での専従者は崎枝家の長女崎枝加銘（カマデ）の母ボーヤであった。

旗頭三種

干立村の旗頭は、三つある。それぞれの名前と形や由来などを書いておこう。

一、パツキ

これは、士族専用の旗頭であつたらしく旗には「東」と書かれている。琉球王の二つ巴の紋章を中心風車を抱き、帶結びのデザインで紋章を左右から抱いている。考案者は不

明である。何時頃旗頭の図案にされ製作されたかわからない。一三九〇年の王府に帰属後か否かも不明である。破損部分を補修し化粧直しをして祭に備える。

二、シシャカシラ（獅子頭）

両刃の槍のデザイン、両刃の先端が下方に垂れ込み、旗には文字はなく虎を描いてある。士族女子の専用であつたらしく階級制がなくなり平民の子女も加わったが現在女子はタツチしていない。旗竿に挿入される基部に龍頭の彫刻が上顎、下顎の二枚合わせで抱いている。饒平名家（のひな、アーレ）の婆さんの若かりし頃、祖納上村まで交歓会に赴く時、あの急坂のピサダ道を婆さんが持ち登り参加したと言う。亡くなつた婆さんの力持ちが今でも語り継がれている。戦後婆さんから直接聞いた話である。

三、サシマタ（刺又）

士の兜の前立ての部分のデサイン、中央に赤丸の飾りがつく。これは平民専用で旗頭の竿に挿入される基部の台座に、長短の矢形が交互に指し込まれ安定させるようになつていい。旗には「光永」の後「星立」と書かれている。古くは、士族の「東」に対し多分平民は「西」の文字であつたろうと思われるが不明。「光永」の文字はもともと士族のパツキの旗の文字であった。

ヤフヌティの歌詞と和訳

- | | |
|-------------------|---------------------|
| 一、キユヌピバ ムトウバショ | 今日の良い日和を元にし |
| ソーゾー | （囃子、くりかえす） |
| クガニピバ ニチギシ | 黄金に比される上々の日に根付けして |
| スンサミ スンサミ | （囃子、くりかえす） |
| 二、ミリクユヌ ウニガイヨ | みろく世を願い |
| ユガフユ ヌウニガイ | ゆがふ世を願う |
| 三、クトウシ チクユル イニアーヨ | 今年作付けする稻栗は |
| シシダマヌ ナリニシ | 数珠玉の実のように稔らせて下さい |
| 四、パイヌカジヌ ウスラバヨ | 南の微風が吹いたら |
| ニシヌ アブシ マクラシ | 北側の畔を枕にするほど稔らせてください |
| 五、ニシヌ カジヌ ウスラバヨ | 北からの押し戻す風には |
| パイヌ アブシ マクラシ | 南側の畔を枕にするほど稔らせて下さい |

ヤフヌティの解説

よき日に節祭の行事を執り行うことの嬉しさを唄い、五穀豊穣の年で海の幸も豊漁でありますようにと祈る。平穏息災の御世を請い受けようとする歌である。

ヤフヌティの踊り方

この歌は現在の公民館であるオイサーから浜への降り口であるオイサーヌウダチから干立御嶽前にかけ浜辺で旗頭に供奉するアンガマの歌である。婦女子主体であるが、パーティの舟子も加わり二列縦隊で旗頭に追随し、長刀に日の丸の小旗を付け持つた少年が先頭につく。男女二人ずつの船頭がタナシを着け、片膚抜きで小太鼓を持ち後尾につく。アンガマの女子はスディナ・カカンを着け紫色のナーサチを頭に蝶結びにした女風で、男子は

白のステテコの上衣、白い下衣を着け、カニヤ風呂敷を覆り白鉢巻きをして棒枝の棒を持つ。兜の前立の飾りの部分を真似、厚紙で剥抜き額につけ締めている。兜の前飾りは、おそらく琉球が征討されて薩摩に所属した後に始まつたものであろうし、日の丸の小旗を持つ少年はさらに新しい時代に付け加えられたものと思われる。

平民の旗頭を先頭に並列したアンガマはヤフ（櫂）の柄の基部を右手で握り左手でヤフの柄の頭部を持ち左股の付け根に置き、ヤフの先端を目の高さに保ち足は四〇度程に開いて立つ。法螺の合図でトウチが唄い始める。「キユヌピ」でそのままの姿勢からヤフを左斜め前に右足を左足先に踏み出しヤフも共に出す。「ムトウバシ」でヤフと右足を元の位置に戻し、「ソーソー」で正面に戻したヤフで舟漕ぎの所作を足踏みしながらなす。歌を終えるまで同じ所作で御嶽前に来て弥勒神迎えのパーリヤを待つ。

軍配団扇が出ているが、これも薩摩の琉球征討後に、ミリク神の威儀を示すために採用されたものであろう。昔はたぶんクバの団扇だったのではあるまいか。

フニヌジラバ

舟のジラバ

一、キユヌピーバ ムトウバシ 　　本日最良の日を基にして
ナイサク ユクユクエロ 　　（囃子、くりかえす）

二、クガニピーバ シラビヨウリ 　　黄金の日を調べて

三、ミリクユーバ タボラリ 　　豊年万作の世果報をたまわり

四、ウシマユーバ マチャウキ 　　争いのない平和な世の中を待ち受けよう

現在配付されている「フニヌジラバ」

- | | | |
|----------|--------|--|
| 一 キユヌピーバ | ムトウバシ | |
| ナーカニピーバ | シラビヨウリ | |
| 二 クガニピーバ | シラビヨウリ | |
| ナーカニピーバ | シラビヨウリ | |
| 三 ミリクユーバ | タボラリ | |
| ナーカニピーバ | タボラリ | |
| 四 ウシマユーバ | マチャウキ | |
| ナーカニピーバ | マチャウキ | |
| | ユーハーバ | |

フニヌジラバの解説

囃子の、「ナイサク」と「ユクユクエロ」は、意味がよくわからない。伝承の際の誤り、聞き違いではないかとも思われる。まず、「ナイサク」は「ナリサク」であれば、五穀と果物の実のナリが稔るようとにいう意味として理解はできよう。次の「ユクユクエロ」は、「ユクユクヨロ」とも歌われるが、元来は、豊年を祈願するという意味の「ユーハーバ」あるいは「ユーハーバ」であつたのではないかと想像してみる。大方の解釈、見解をお願いしたい。ご叱責を乞うしだいである。

舟のジラバの所作

神様を迎える舟漕ぎ神事と、そのあとの余興のパーリヤ競漕船の帰投まで、「アンガマ」

の婦女子たちは、両の手を開き、肘を曲げ、腕を肩の高さにし、掌を上に向けて、前方に手首を曲げて招く所作を続ける。両足は交互に軽く膝を上げ下ろして、二、三歩小刻みに踏みながら前進と後退をくりかえす。

狂言「カビラパチカイ（川平早使い）」の台詞と和訳

ハダダー カビラパチカайдサリ、カリユシヌ グユシン マグジョウンヌ キヤンテ
イカラ クヌンザシャ、ハー ワーガ ウチヌタル ンマ クシンマ ウチヌティ、ファ
ネーランドー ゴアンドウイナシ カンドウイナシ、グールフチ ガーラフチ、ウチカキ
ウチヌティンジヤリ ミリバク ヌンザシャ、ハー ティナミングデイントウララン、シイ
グヒイジユトウラランヤラブザキンカイムチカサニラッティ、ヤクグーキチグードヤル。
ウンカラヒチムドウシマイヌヒラガミタティティ、アトウヌヒラウツトウミンガシウシホ
ウガカイホウヤリバハダーダ、カラヤマミチウドウイクイクイシ、マンシイダキトウンヌ
ブティミレー、エーマサンズースウフカリユシャ、チッシャミシャギウヤドウメーカキテ
イトウクツトウナヤビタン。ナマドウウーイシウカイヤーヌメーユシティチャヤル、ユダ
ンシタルシデヤ、ワアガサビラン、クヌンマヌシワザユイアティドウユダンサビタル、ハ
ツトウダーダー。

現在配付されている「カビラハヤチカイ（川平早使い）」

ハアー ダーー ダーー ダーー

カビラハヤチカイドオサリ

カリユシヌ グジョウグヨウンマウンヌキランティカラ クヌンザシャ

ハア ワアガウチヌツタソマ クシインマウチヌティ フアーネエランドオゴウ アン

ドウイナシ カンドオイナシ グルフチイガラフチイ

ウチカキウチヌティンジヤリバ クヌンザシャ ハー ヒジュウトウララン シイ

グヤラブザキンケイ ムチカサネラッティ ウニゲーキチグードヤル

ウンカラヒキムドウシ マイヌヒラガミタティティ

クシイヌヒラウツトウミンガシ ウシホウガ カイホウヤリバ

ハアー ダーー ダーー カーラヤマミチ ウレーキイクイシ

マンシダキ トウンヌブティミレー

エーマサンジュウヌウフカリユシャ

チッシャミシャギ ウヤドウメエカキティトウクツトウナヤビタン

ナマドウウグイシ ウーカリヤヌメエ ユシティチャール

ユダンシタルシダイヤ ワアガユダンシャビラン ンマヌシワザユエアティドウ ユダン

シャビタル

ハツト ダーー ダーー ダーー

カビラパチカイの和訳

ハダーダ川平からの早使の御用馬でございます。無事航海を続いている御用船を発見し次々合図がありましたので、一刻も早く報告しようと早々と馬に飛び乗りましたが大層慌てていて装着した鞍が後ろ前になつており、これを正常に戻し直し早速乗馬して駆けまし

たが疳の強い暴れ馬で、手綱捌きどころか制御ができずグールフチガーラフチと持つていいかれ到々平素は人も通らぬ屋良部崎まで引きずられてしまい、全くもって氣狂い沙汰であります。やつとの事で馬を取り静め向ぎを変えて尻をひっぱたいて漸く川良山道を登りきり万勢岳まで辿りつき遙か石垣の港を見れば、八重山参着の御用船は既に港に入り安着し碇を下ろしていく、役人使者の衆は美崎在の役人詰め所に投宿安堵している様子、これは一大事大変な不覚である。ホウホウの体で詰め所へ馳せ参じ、「早使御用の者只今参りました。御報告が遅れて申訳御ざいません。何しろ疳の強い暴れ馬で制御が出来ず屋良部崎まで持つて行かれてしまいました。私めの油断ではなく馬の故ですので御赦ください。

カビラパチカイの解説

王府よりの諸役人使者の乗った船、嘉利吉の船を早期に発見報告しその出迎え応接に遗漏手落ちのないよう次々に火を炊き、平久保から野底頂、川平と合図をなす火の番人がおり川平からは早馬をもつて、石垣在役人詰め所まで報告する早使人が常駐していた。

石垣島火の番人早使の口上その仕様が干立の節祭の狂言に何故か組み込まれている。伝承もないで知る由もない。後年にお祭りを面白くするために役人衆が組み込んだであろうか。

狂言「パチカイ」の台詞と和訳

ハダーダ、アガリシラクムヌナカカラトウンディタルパチカイドサリ、ハーワガヌティチャールンマミリクユガフヌンマドウサリ、ハーサテイサテイクヌンマスカラジンジャリミリバ、ノウリマイヌマルキンジヨルグトールンマドウサリ、ハーサテイサテイクヌンマスチビンジャリミリバ、ノーリマイヌマルキンジヨルンマドウサリ、ハーサテイサテイマイカキミショリウミカキミショリ、ハットウダーダー

現在配付されている「ハヤチカイ（早使い）」

ハアーダアーダアーダアーダアーハアリシラクムカラトウンディタルハヤチカイドオサリ
ハアーワアガヌティチャールンマミリクユガフヌンマドオサリ
ハアーサテイサテイクヌンマスナニインジャリミリバ
ノオリマイヌマルキンジヨウルンマドウサリ
ハアーサテイサテイクヌンマスチビインジャリミリバ
ノオリマイヌマルフクルンジヨウルンマドウサリ
ハアーマイカキミソウリウムカキミソウリ
ハットウダアーダアーパラランパンパン

パチカイの和訳

東の空に棚引く白雲の中から飛び出して来た果報をもたらす弥勒神からの早使の馬であります。僕私が乗ってきたこのお使い馬は唯の馬ではありません。五穀の豊饒は元より山の幸海の幸をもたらし、弥勒世果報を約束する神様のお使いの馬でございます。僕皆々よくこの馬を吟味してご覧ください。髦（たてがみ）はたわわに稔った稻や粟を束ね括り

つけたように首筋から垂れ下がり、またお脣を見れば良く熟れた稻栗の穂を脱穀し俵詰めにしたよう、丸々としております。今年作付けする五穀は豊作で海も豊漁である事をきっと約束します。神様のお告げですから、夢々疑つてはなりません。

パチカイの解説

弥勒の神が村人の願望を叶えてやるべく、肥えた馬に託して風刺している。豊作豊漁は氏子一同の願望で来夏世を期待している。

狂言「ウシウイキヨンギン」の台詞と和訳

ホーへホーへ、タイユウガ タイインヌ アーライーリップカラ、ウミカキルクトウ テ
イチエウンヌキヤビラサリ。ホー、ヤマトウヌアガリヤマカラトウンディタルウセーター
ガウシディユン、ヤマトウヌアカマリハンジヨガウシディユンバーサティサテイ
クスウシヌナーニンジヤリミリバ、ヤマザキザラザラムイトウルウシデービル、ハーサ
ティサティ
クヌウシカラジンジヤリミリバチヌヌターチ、ミンヌターチミイヌターチ、フチヌティ
チパイヌユーチキザヌヤーチブウヌティムイトールウシデビル、ハサティサテイ
クヌウシヌチヌミリバ、イツチカザリビンヌグトウ、ブーミリバーノーリマイヌグトウム
イトールウシデービル、ハーサティサテイ
クヌウシヌキンデーフンデーセールタナカイ、マイピトウムトウウビリバ イチマンムト
ウ フタムトウウビリバ ニマンムトウ ミイムトウウビリバ サンヨーシラン、ハーサ
ティサティ
クヌターヌ アカマラマイヌ、ミイナリ プーナリクウバ シチハツショーナチクターヌ
マイデービル、クヌターヌマイシ、ミシチクリバミシシングシクウワソムリバウワシングシ
ク、サキタリバイディミジハリミジヌグトウル、タースマイデービル、クヌサキヌディメ
ースミチカラウデーフイフイトウローヤ

現在配付されている「ウシウイキヨンギン（牛追い狂言）」

ホウヘエー ホウヘエー ホウヘエー

タイユウガタインヌアライーリップカラ

ウムガキヌクトウティーチ ウンヌキヤビラサリ

ホウ一 ヤマトウアガリヤマカラ トウンディタルウシエー タアガウシディユン

ヤマトウヌアカマリハンジヨウガ ウシデユン

ハア一 サティ サティ クヌウシヌ ナニンジヤリミリバ

ヤマザキ ザラザラムイトウル ウシデービル

ハア一 サティ サティ クヌウシヌ カラジンジヤリミリバ

チヌスタアチ ミヌタアチ アシヌユウチ

キザヌヤアチ ウヌティチ ムイトウル ウシデービル

ハア一 サティ サティ クヌウシヌ キリテーフミテーセール タアナカイ

マイピトウムトウウビリバ イチマンムトウ フタムトウウビリバ ニマンムトウ

ミムトウウビリバ サンヨウシラン

ハアー サティ サティ クヌタヌマイヌ アカマヤマイヌ
 シチハツショウナチク タアヌマイデービル
 クヌタヌマイシミシチクリバ ミシングシク ウワソムリバ ウワソングシク
 サキタリリバ イディミジハリミジヌグトオル タアヌマイデービル
 クヌサキイヌデイ メエヌミチカラ ウデフリトオロウヤ

ウシウイキヨンギンの和訳

太平の御世の平穏無事息災を祈願し祝う御座席に吉い報を一つ申し上げましよう。諸大和の東方の山から不意に飛び出した牛は誰の何という牛でありましょうか。これは大和の赤毛の牛で繁殖の多いすばらしい牛で御座います。首筋をよくみれば毛が荒くザラザラしており頭には二本の角があり、耳が二つに目が二つ口が一つあり、また下肢を見れば脚が四つで一肢に蹄が四つづつあり尻尾が一つある牛でございます。この牛の角は神に供える一对の飾瓶のように見事に揃い、尾をみれば稔りの稻栗束を括り下げたようにある。この牛で踏み碎いた田圃に稻苗一本植えれば一万本に、二本植えれば二万本に三本ではそれこそ勘定出来ない程に分けつ増殖します。この田圃に植えた稻が実になり穂になつてくれれば三〇束で七、八升も搗くことが出来る。収穫の多い田の稻であります。この田から取れる稻でお神酒にすれば神酒が仰山にとれご飯にしてお握りにすればお鉢に城のよう盛り上げられ、お酒にすれば泉が湧き出るよう潤れることはありません。この恵まれたお米で造つたお酒を鱈腹呑んで胸を張り、腕を振つて大威張りして村の大通りを自慢して通ろう。

ウシウイキヨンギンの解説

方言で稻をマイと言ひ田植えをマイウビ、タウビと言つてゐる。

片手で握れる程の稻苗束ねて束（タバ）とし、三束（ミータバ）合わせて一束（チカ）とし一束（チカ）を一〇束合わせて一抱え（マルシ）とする。一マルシは三〇束である。

節アンガア「キユヌフクラシャ」の歌詞と和訳

一、キユヌフクラシャヤ

ナウニジヤナタティル

今日の嬉しくも喜ばしい事は
何に例えよう

チブティウルハナヌ

チユイチャタグトウ

ヨホンナ

二、クヌトウヌチヌミヤヤ

ウヤグミサアアリドウ

シチグトウヤクトウドウ

ユルシタボリ

シチグトウナリバヤ

スリドウフシャムヌディ

カンヌトウシナリバ

ブナリフシヤル

結願ともなれば神様へのお供物の準備で
姉妹がいてくれればと思う
(男手ではどうしようもありません)

この御嶽の庭、広場は

神々様が集う所で大層恐れ多いけれど
節祭と言う欠かす事の出来ぬ行事なので
お庭を踏み荒らしますがお赦し下さい

揃いの衣装がほしく
節祭の行事ともなれば

結願ともなれば神様へのお供物の準備で
姉妹がいてくれればと思う
(男手ではどうしようもありません)

四、ブナリフシャムヌヤ

ナウドウフシャムヌガ

タブサバギフシ

ウリドウフシャル

五、ビキリヤフシャムヌガ

ナユドウフシャムヌガ

バギザシカタナドウ

ウリドウフシャル

姉妹の欲しい物は
何だろう

人並みに身嗜みをするための櫛
それこそが欲しい

男兄弟の欲しい物

何だろう

脇差と太刀と

それこそが欲しい

(この日だけでも武士と同格になつて見たい)

現在配付されている「キユヌフクラシャ」

一 キユヌフクラシャ ナウニジヤナタティル

チブティウルハナヌ チュチャタグトウ ヨーホンナ

二 クヌトウヌチユミアヤ ウヤグミサラリドウ

シチグトウナリバヤ ユルシタボリ ヨーホンナ

三 シチグトウナリバヤ スリドウフシャムヌディ

カンヌトウシナリバ ブナリフシャル ヨーホンナ

四 ブナリフシャムヌヤ ナユドウフシャムヌガ

タブサバキクシドウウリドウフシャル ヨーホンナ

五 ビキリヤフシャムヌヤ ナユドウフシャムヌガ

バギザシカタナドウ ウリドウフシャル ヨーホンナ

節アンガア「グサクティ」の解説

節祭は百姓にとって誰にも遠慮、気兼ねも製肘も受けぬ天下御免の祭日である。階級制の厳しい封建時代の圧政に喘ぐ哀れな百姓達の嘘らざる本音を初にうたいあげ、大きく背伸びし吐息して束の間の息抜きをする様子が伺え惻隱の情を禁じ得ない。百姓なるが故の蔑視、差別、切捨て御免の生命の軽視、過重な貢租負担の人頭税、しかも明治三六年に廃止されるまでの二六六年間氣の遠くなるような年月、泣いてもなききれるものではない。

節アンガア「グサクティ」の歌詞と和訳

一、グサクティヌグイ ヨホンナ

五尺手拭い ヨホンナ (囃子)

ナカウスミティ ヒヨンナ

弓矢八幡

ナカウスミティ

中を染めて

二、シカクハシラ ヨホンナ

四角柱

ワドウニヌシティ

弓矢八幡

ユミヤハチマン

我が胴によせて

ワドウニヌシティ

戸をひく

三、ヤドウヌナビク ヨホンナ

私がよせて

ワリガユシシティ

私がよせて

ユミヤハチマン
ワリガユシティ

弓矢八幡
私がよせて

四、ウキヌトウナカ ヨホンナ

沖の海の中

サユワタティティ
ユミヤハチマン

弓矢八幡
波をけたてて

五、ノボリクダリ ヨホンナ

上り下り

フニヤウマチ ヒヨンナ

舟を待ち

ユミヤハチマン
フニヤウマチ

舟を待ち

現在配付されている「グシャクティ」

一 グシャクティヌグイ ヨーホンナ ナカウ スミティ ヒーヨンナ

ユミヤハチマン ナカウ スミティ

二 シカクハシラ ヨーホンナ ワドウニ ヌシティ ヒーヨンナ

ユミヤハチマン ワドウニ ヌシティ

三 ヤドウヌナビク ヨーホンナ ワリガ ユシティ ヒーヨンナ

ユミヤハチマン ワリガ ユシティ

四 オキヌトウナカ ヨーホンナ サユワ タティティ ヒーヨンナ

ユミヤハチマン サユワ タティティ

五 ノボリクダリ ヨーホンナ フニヤウマチ ヒーヨンナ

ユミヤハチマン フニヤウマチ

グサクティの意訳

一、五尺手拭いを思わせる吹き流しの旗は真ん中を染め貿易船の目印にし湾口近くに立ておく。

二、引き戸は我が体に強くピッタリ引き付けて軋まぬよう、家の者に判らぬようそつと開ける。

三、引き戸を開けるのは忍ぶ恋人合図があつて開けるが、やつぱり少しは軋むようだ。

四、沖合遠くゆく帆船は帆に一杯風を孕ませ、舳先で波を蹴立て泡立てて走る。丁度湯が沸騰し泡立つようだ。

五、波に乗り降りして走る船は、八幡大菩薩の御加護があるので大丈夫、安心してよろしい。

節アンガア「グサクティ」の解説

この歌は錦芳氏慶来慶田城の南蛮貿易船の目印、吹き流しの旗と思われ娘の合意の上の失踪の際の挙動を唱い、親元からの追跡を怖れながらも恙なく出航にこぎつけた安堵感、万帆に風を受け波を蹴立てて走る様を唄つたものであろう。

大昔は祖納村を親村とし役所もあり、他の村々は親村の方針に従う慣例であった。多分慶田城一統の影響はまぬがれず、この歌が干立村に組み込まれたものであろう。一六四一

年大和在番が駐在し始めた事もあって、弓矢八幡、御座るはそれを物語っている。伝承も記録もないがそうとしか考えられない。

これは、故石垣長有さんが解説されたものである。

節アンガア「グコパ」の歌詞と和訳

一、グコパヒヨナ イサーやリコヌ

グゴヌ キラマチ

フトウキミセマセ

タントン

鶏の羽根は（囃子）
鶏の頭髪は
たまには洗いて洗つてごらん

二、グゴヌ ヒヨナ イサーやリコヌ

グゴヌカラジハ イナカカラジ

カニユムタンスリー、カウカウトウ

タントン

鶏の頭の毛は田舎の髪型だ
鳥がカウカウと笑っている
（囃子）

三、ハナヌ ヒヨナ イサーやリコヌ

ハナヌ ユイナル サトウキム スラス

イランヤシヌ スーリ ワガキム スラス

にする
タントン
（囃子）

四、ナガイ ヒヨナ イサーやリコヌ

ナガイカタナオ サシウキゴザル

ウシルサヤニテ マイヌアガル

タントン

長い（囃子）
長い刀を差し置いています
後を鞘にして前が上がる
（囃子）

グゴパの意訳

一、ブザ土百姓の頭髪は鳥の巣のようで梳った事がないと見え、グジャグジャして不潔で見栄えがしない。たまには頭髪をといて洗い清潔にして櫛で梳くがよい。少しは見栄えがし不快感も与えぬ筈だ。

二、百姓の頭髪はやっぱり田舎者の髪型だ。不潔で汗臭い。身だしなみが悪いのは仕方ないとしても汗臭く感情を他人に与え、鳥がカウカウと笑う。

三、容貌を鼻にかける女性が多い、男がチヤホヤするので余計自惚れ天狗になり鼻持ちならない。彼女もそんなであつてほしくない。軽薄な男に騙されはしないかと心配である。

四、土百姓のくせに武士の真似をし大刀を差しているが馴染まない。刀の鞘が垂れ下がり柄頭が直立して天に向い、全くもつて風情がない事おびただしい笑止千万だ。

節アンガア「グコパ」の解説（石垣長有さんによる）

武士を真似、太刀を差したブザを嘲笑したもので、その風体を鶏、田舎者になぞらえ櫛目の入らぬ頭髪を不潔がり鳥に託して笑っている。階級を離れ解放感に浸りたい心情は諒とするも哀れである。刀を差し武士を真似た処でお里が割れ可笑しさを通り越し惨めである。

グコパの解釈は難しく、人それぞれあるが「グゴ」を方言の「ググ」つまり鶏と解し

「パ」を羽根と解して今に至っている。「グゴパーヒヨナイサーヤ」とここでも余計な言葉「イ」が挿入されている。「ナ一」と伸ばし「サ」と続けるべきである。

節アンガア「フニヌク」の歌詞と和訳

- | | |
|------------|-----------------------------------|
| 一、フネ ヒーヨナ | 船は
櫻の木を |
| カシヌキドウスリ | 船材にして造りました |
| フネデゴザル | はやし（以下同じ） |
| サースサヌイヒヨイ | 帆柱は |
| 二、バラ ヒーヨナ | 杉か松の木の若木直材の
柱でございます |
| シンギマチスリ | 滑車は |
| バラデゴザル | 堅いシマトネリコの木
の滑車でございます |
| 三、シベ ヒーヨナ | 美繩、引く手綱は
麻、チョマでなつた
美繩でございます |
| コバナキドウスリ | 帆は |
| シベデゴザル | 三角蘭又はガマの葉っぱ
の帆でございます |
| 四、ミナ ヒーヨナ | 鶴が |
| アサヌブドウスリ | 啼き刻を告げた |
| ミナデゴザル | 夜半だが出航の時潮刻である |
| ヤポ ヒーヨナ | 船を |
| サラヌビドウスリ | 出すなら |
| ヤポデゴザル | 夜半が良い。 |
| 五、トウレ ヒーヨナ | |
| ウタイショラバシリ | |
| ユルワユナカ | |
| 七、フネ ヒーヨナ | |
| イダショラバシリ | |
| ユイダシワリ | |

節アンガア「フニヌク」の解説

貢納船の材は西表島は全島が山で木の種類も多く材質も良好で、深山には高い大木も多いから、スラ所（造船所）が古見村につくられ後に船浦に移った。三反帆の舟は干立でも造り、ウナザシの耕作地への地船だつたらしい。苧、麻で美綱を三角蘭や蒲（スイ）で帆をつくり帆柱に杉松と唄つていて。杉の木はアラシク寄りの前大屋の田圃の畔際に一本生えていた。自然木か他島から取り寄せ植栽したものか不明だが、今はない。タカラ浜ジイリヤ洞窟の天井で削り取つた箇所がある。帆柱の先端に当たりさしさわる部分が削られ先人の手垢が今に残つている。

最後の句の夜舟を出せというのは、潮刻も都合よい。妻女の涙顔は見るのも辛いという意味であろう。

ミリクの臨場とミヤ巡回

ウシマ世、西方中国大陸から粟種を持ち来て食生活に潤いを与えて下さつた神を、ミリ

ク菩薩として招請し臨場した証として、大勢の眷族を引き連れ軍配団扇で前に扇ぎ時折、後ろに続く眷族を招きながら巡回する。長刀に日の丸の小旗をつけ持った少年がミリクの両側につき従い袖を持つて供奉する。眷族がこれに続き小太鼓、笛、銅鑼で音頭をとり、ミリクの歌で広場に出回る。眷族の服装はヤフヌティで記した通り。

ウシマとは、大きい島つまり大陸の事である。粟の種子をもたらした大陸からの潤いある暮しがウシマ世である。

ミリク節の歌詞と和訳

一、ダイグクヌ ミリク
バガシマニ イモリ

クトウシカラ バガシマ

ミリクデムヌ ミリクデムヌ

ササユヤサ スリササ

二、クトウシユヤ ミリク
ヤイスユヤ ユガフ

メヒンマサラシタボリ マサラシタボリ

三、ウシカチヌ クガニ
ミリクユヌウカギ

ウシカジン タントウ チカチタボリ

四、ミリクユン イモリ
ユガフユヌ ウカギ

ギレムヌ ブナジン スルユティ

テ ブドウリアシバ ブドウリアシバ

五、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

六、ミリクユン イモリ
ユガフユヌ ウカギ

七、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

八、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

九、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

十、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

十一、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

十二、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

十三、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

十四、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

十五、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

十六、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

十七、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

十八、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

十九、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

二十、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

二十一、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

二十二、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

二十三、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

二十四、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

二十五、ミリクユヌウカギ
ウシカジン タントウ チカチタボリ

ミリク節の解説

「サーサユヤサスリサーサ」の囃子を干立村ではこのように唄っている。喜舎場永・先生は三、三、五、八と解説され定説となっているが、各村々の唄い方があるとの意見もある。

りその意見のままにした。

ギレムヌは、優れ者を指す言葉であり、ブナジは女頭役、今で言えば婦人会長である。

神司のトウリムトウ送り

神司は祈願座をたち鳥居の所まで退きイビへ向い、团扇で招き「ニガヤカラカイリヨラ、チカヤカラムドウリヨラ、バガヤドウニムドウリ、ブドウリアシバ」とミリク節を唱い、神様へ暇を告げる。旗頭サシマタの先導でササラニシの道を唄い旗頭を上下に踊らしながら道行し戸根元まで送る。

ササラニシの歌詞と和訳

- | | |
|--------------------|-------------------|
| 一、ササラニシカジヤ ハリ | さらさらと北風はそよぎ |
| ナミヌハナ スラス | 波の花をたてる |
| ハリジャンナヨウ ネリバジヤンナヨ | (囃子、二句以下くりかえし) |
| 二、ワング ミヤラビヌハリ | 我が思う乙女は |
| サトウガ キムスラス | 男の恋心を晴れ晴れしくする |
| 三、ウブトウタチユル ナミヤハリ | 大海にたつ波は |
| ピダウチドウ ムドウル | 岸辺に打ってはもどる |
| 四、ミチニタチユル ンゾヨハリ | 道に立つて待ちわびる妻女は |
| ティトウリ ムドウル | 帰った夫に安堵して手をとつてもどる |
| 五、タイラトウドウルシヌ ハリウヒリ | 汀良町轟の近辺に立つ神様 |
| ウリニタユル | それを頼りに祈願する |
| ウマンチユヌ ハリマギリ | 数多くの人々の |
| チムヌ ユタシャンド | 心の豊かさよ |
| 六、インカクジヌ ウスバニハリ | 円覚寺の側に |
| タチディイワル ウンプトウキハリ | 立つておられる仏様 |
| ワング ユクシディヌハリ | わが思う人が心がわりしたら |
| アラバ ウドーシティ タボラナヨ | それを教えさとしてください |

ササラニシの意訳

- 一、さらさらと初秋の北風は長閑にそよぎ、岸辺に寄せる波も穏やかである。
- 二、吾が意中の乙女の笑顔は何より勝つて我が心を和ませ妄念を払い疲れも吹き飛ばしてくれる。
- 三、沖合遠くから寄せ来る波は岸辺まで寄せて返す。その波のように悪罵嘲笑も右の耳より左の耳へ抜けさせれば怨念も残らず平常心を保つ事ができる。
- 四、道角に停ち安否を気遣い待ち侘びる妻女は無事な夫の姿を見て、安堵して手を取り合って家に帰る。
- 五、汀良町の轟の近辺に祭祀されておられる神様、それに万幅の信頼を寄せ祈願する大勢の人々、その心根は美しく且つ豊かである。
- 六、円覚寺の楼門に立つておられる仁王仏様よ、固く約束し誓いあつた乙女が邪な心で若し、私を裏切るようなことがあつたならそれはいけない事だと教え諭して下さい。

ササラニシの解説

意中の女を岸辺に寄せて返す穩やかな波に託し、その笑顔は何より我が心の安堵、と歌いあげる。心変わりしないように、もし変節があれば仁王様よ、それはいけない事だと教え諭して下さいと、その心根はまことにいじらしい。貢納船乗り込みは、選ばれた誇りと残す女の心を計りかねてている。しかし、やはり女は弱く、シパヨヒユングドウにある通り、筑佐事の権威に負けとうとう賄女にさせられている。往時のブザ（平民）の生活の暗さが目に浮かび言葉もない。

水元の神への感謝

節祭の二日目にトゥズミ（止留）の行事を行なう。その翌日（三日目）は各戸の井戸を浚えて水元の神への祭祀を怠らなかつた。昭和三二年に簡易水道が完成し道路の四辻毎に水道栓のポストが設置されるようになつた。それからは、各戸の井戸は無用になり、水元の神への祭祀も廃止されている。

干立地内に村立して以来長年にわたり生活用水として生活を支え使用されてきたウイスカー、アダヌカーリの両塞井戸の水元の神への報恩、感謝のためにシーシャカシラ（獅子頭）とよぶ、旗頭を立て、道路の草を払い、両井戸を浚えて清浄にし、棒芸を一、二点奉納している。なお、スリズ（昔の村の集会場）への帰途、旗頭を先頭に各家を訪れて、迷い込んだ悪霊亡者をドラや太鼓で屋敷内から追い出し、清めをして行事は終了する。

多柄村を建てた有若氏の歩み

多柄村は、現在の浦内川河口の左岸、方言でカシピダという岸の西側のナメラ台地にあつたとのことである。この村は、有若氏の大宗泰基が村立てしたと伝えられるが、村立ての年代も不祥、記録もない。喜舎場永珣先生の『八重山歴史』では、有若氏は泰基を祖とし三代の泰全まで記載され、一四代寛智以下はない。寛智が早世したので弟の寛次が一五代を継ぐ事になる。姓は登野城である。有若氏は名の始めは「泰」の字をもちいてきたが、尚泰王の泰の字であることから遠慮して一八五七（安政四）年に泰の名字を寛に改める。（大浜正演さんの話）

一五代寛次は日露戦役に従軍した。除隊後満州に止まり馬賊の頭梁になり、相当勢威を振るい生地の西表までその名が知られていた。本土の女性と結婚、大正の三、四年頃に一時帰郷して、財産を処分し祖先の位牌を桃林寺に預け台湾へ渡ったが、その後の消息は不明である。後にしてするように帰省当時の面白い小咄が残っている。浦内村にはその生家が昭和三、四年頃まで残っていたが、大きなヌキヤ（貫屋。掘建て式でなく、礎石の上に建てる家）であった。

一四代寛智は浦内村の平民宜間クヤマを娶った。階級制の名残りで婚姻届けが出来ず、届け出のないまま長男蒲太（カマタ）、次男三太が生まれた。ところが、寛智が早死したため、子の入籍はどうとう出来ずじまいで、母の宜間姓を名乗る。その子の正喜と正二郎兄弟は、現在宜間姓であるが、有若氏直系の第一六代の子孫である。（登野城寛次の実妹の故登野城ナベマさんの話）

多柄村を建てたと伝承される有若氏の泰基と祖納村の大竹祖納堂儀佐は、ほぼ同年代の人であろう。一人とも錦芳氏初代の慶来慶田城用緒より先の人物ではないかと考えられる。多柄村は一六四〇年ごろの「両先島絵図帳」にすでに登場する古い村である。ある書物には、西表島には姑禰村（現在の古見村）、多柄村、祖納村が在ったと書かれていたが、相當に古い村だと認識している。

勲章を抵当にお金を借りた人の小咄

有若氏登野城寛次さんは日露戦役に従軍、金鶴勳章を拝受していた。大正初年頃帰省して財産を整理処分し台湾へ行く途中勲章を「バンガウジ」という渾名の人物に示し、「この勲章を持って居れば公の席では他の人を押さえて最上席に座りその待遇が得られる証しの物で、自分の命の次に大事な物である。台湾へ行き帰って来るまでこれを抵当に拾円程融通してくれ」と頼み込んだ。「帰島後は直ちに勲章と引き換えに借りたお金を支払う。台湾には兵隊当時の戦友や友人が手広く事業をやってるので心配はいらない。」と言葉巧みに持ちかけ拾円をせしめて渡台しそのまま行方知れずになり「バンガウジ」は大損をしたと言う（小底ブナリさんの話）。

大津波以前の浦内川の流れ

浦内川の河口にそびえている大、小二つの岩石の小島をアトウクという。昔、アトウクは現在のような離島ではなく、河口南岸のカシピダの岸に続いていたと伝えられている。

浦内河口の北側の細く伸びた砂地（兼久地、方言ではカノー）の端をイブの先というが、ここは、アトウクの東側のパナヌリの岸に連なっていた。つまり、現在の浦内川の河口は締め切られていて、河口からカトウラ地区にかけての一帯は潟湖（方言でカタバル）になつていた。一七七一（乾隆三十六）年、いわゆる明和の大津波までの浦内川は、名前をウラダ（浦田）川と称していた。クモツタ、蒲（方言ではスイ、和名オオシンジュガヤ）の生えた湿地帯、フカンタ、アマダウチ、マラントウを経て、今の与那田川に出ており、支流はサキヤン、アバナリヤ、ウセキ川を通つてタカラの浜に流れ出でて、金座山、アラシクの丘は二つの川に挟まれた離れ島になつていたという。

一七七一（乾隆三十六）年の明和の大津波はタカラの兼久地を乗り越し、浦田川支流を土砂で埋め尽くして本流に合して一体となり、カトウラ慢湖を満杯にして浦内イブの端を突破し現在の浦内川河口をつくる。これ以後、浦田川は、浦内村の名を冠され浦内川と名称を変え現在に到つているといわれる。

アトウク島のこと

また、千立村の祖先がナメラという場所に住んでいた時代の御嶽は大アトウクにあつたという。（故大浜正良さんの話として小底宣佐の故の小底ブナリさんに聞いた）その証は、ウマタより山越してナメラ浜に至るカシピダ山の鞍部に深い洞窟があり、その洞窟に風葬とみられる人骨がたくさんあるのを昭和二十四、五年ごろ平得泰次さんと東江（現在は宮里）さんの二人が探査した結果として話してくれた。

アトウクの探査は故石垣長有さんが昭和二十三、二十四年頃おこない、伝承の通りであることを確認したと話しておられた。それによると、太アトウクの頂上の窪地に、サンゴ礁で積み上げられた墓所が確認され、有若氏初代泰基の墓所と思われるものが現存するという。昔からアトウクは神高いところと言われ、覗き見ることさえ禁じられていたが、カシピダの崖に続いていた場所が明和の大津波によつて土砂が崩壊し、河口になり、独立した切り立つた岩壁になつてゐるため昔は登ることができなかつたのである。現在でも登ることはなかなか難しいが、雑木が生い茂るようになり、切り立つた側面にも木が生えており、木を伝つて頂上まで登ることができるようになった。戦後海賊キッドの財宝を求めて頂上をきわめた石垣長有さんの発見である。

また、多柄のジイリヤ洞より北側一帯スバの所をナンダディと呼んでいる。ナンダディとは波立の意味で、一七七一年の明和の大津波の時に寄せて來た波が同地にぶち当たり、返した所からこのように呼称される様になつたと伝えられる。

多柄村の移転

ナメラ台地に住みついていた多柄村の人達は、この場所が冬期の北風を真正面に受け、粟、黍などの作物への被害が大きいため一部は浦内村へ移転した。残りの大多数人々はナンダディの台地や浦内川の支流の河口のタカラの兼久地（カニクジ、砂の堆積地）の平地に移つた。そして御嶽をアトウクよりスバアの岬へ移して居つくが、ナンダディは、方言でパイタカと呼んでいる脚高蟻が多く、寝せ付けてある赤ん坊にたかり喰いつく等の害があつて、子育てが出来なかつた。一七三四（雍正一二）年に過半数がウナザンに移り村建てをする。それを裏付ける史料としては、移転三年後の一七三七（乾隆二）年の『參遭

状』の中の「村屋調」に多数の多柄村人が祖納村から一里九町三六間（五千三五七メートル）、浦内村から五町五四間（六三七メートル）の所に村建てしたとある。おそらく距離的にみて、現在の住吉村のあるスギバン、ナバンガ一（川）の台地周辺であろう。子供の時分、父に連れられて炭坑の坑木切り出しに行つたおり、石垣囲いの住居跡地と思われる個所に陶器やガラスの破片等が散乱しているのを見ている。ウナザシ御獄も、今でも香炉が見受けられ、拝所の跡が確認されている。

スバアとタカラの台地やタカラの兼久地に残つた人々は、多柄、干立と二つの村に別れたらしい。一七三八（乾隆三）年の『洪武の始めよりの王代記』にある「ウカリ、不シャテ、タカラ、ソナイ」とある村名はタカラ時代で、ウナザシへ過半数が移住する以前の事と思われる。しかし、ここタカラ地区は方言でマヤチコーというミミズクの類が多く、夜毎啼き叫ぶ声が氣味悪く、且つマラリアの風土病に痛め付けられ人の心は萎縮してしまう。ミミズクの大群が崎山半島南西側のウツムリにあつたピサドウ（平戸）村を襲い村人を大半死に追いやり、ピサドウ村はそれで廃絶の憂き日になつたとの伝説もあり恐れおののいていた。宮良孫勇さんの父君の宮良孫副さんの話である。

適地を求めて転々と移動をくりかえす

一七三八（乾隆三）年、多柄村の残余のうち、七〇人ほどは、ウナリ崎のニシミジ（三軒屋と俗称する）、フサキ（富崎）野に移り、小村を立てた。ところがここは水利に乏しく、日照りが少しでも続けば蝶が飛ぶという乾田で、人力のみでは耕作に難渋した。当時の在来稻は長稈のため倒伏して未熟米が多く減収し貢租の上納にもこと欠くうえ、飲料水は富崎岳の麓まで往復せねばならず、住民は疲労困憊していた。そこで飲み水の水利を考え、船浦湾に注ぐマーレー川の左岸に移動、ピナイ滝の名を採りピナイ村と称した。ナゾラ、マーレ、ピナイ、ニシダ（西田）の川があり、水利には恵まれたものの、反面多湿で蚊がが多く風土病のマラリアにも祟られて移動を余儀なくされ、船浦崎のアシザイシ（足駄石）の所の平地に移り、小村を立てる。この移動年月は不明で、伝承のみが残つている。（故小底ヅナリさんの話）

一七三八年多柄村を離れ、一七六八年上原村建てに合流するまでのおよそ四十年間、ニシミジ（三軒屋）、マーレー川左岸地区、船浦のアシザ石の平地と放浪し移動を重ねる事になり哀れとも何とも言うべき言葉もない。自主的の移動の形態をとつてはいるが、実体は貢租のための強制移住であつた。ここにも琉球王朝役人の横暴と政治の貧困が見られ忿懣やるかたない。マーレー川左岸の村跡のことはブルドーザーを持って農地整理に当たつた故石垣長有さんが話してくれた。

チヨンギ（支那将棋）

年代にすると黒島英輝さんより五、六代前の人で、マラケ（黒島家）の先祖に、唐と呼ばれた中国での通訳として活躍した人があつた。たまたま貢納に上府帰島中暴風にあい、福建にたどりつき滞在中、唐人のチヨンギを指すのを側にいて見覚えた。或る日、いつものように見学中、思わず「駄目だ」と口走つた。開碁将棋は岡目八目とかいつて側で見えておればよく解るらしい。これを聞き付けた唐人の指手は怒つて無理に駒を握らせ指し始めた。最初の程は侮つて片手の駒を落として指したが、案に相違し手強く忽ち負けてしまい、

二度三度と指し重ねたが勝つことがとうとうできなかつたという。唐人は黒島の技量に感伏し将棋盤に駒を添えて件の黒島に贈つたという。

黒島の先祖はその将棋盤や駒を持ち帰り、王府の役人等に駒の進め方を教えたという。以後琉球に支那将棋が広く伝わつたとのことである。駒は黒木（リュウキユコクタン）ジン木等の固い木でできており、直径三、四センチ厚みが一、二センチ程であった。このことは故黒島英輝さんに聞いた。

昭和の一二、三年頃まで、故新城寛忠さんが主導し、那根弘さんや今は亡い古見用規さん、祖納用美さん達と指していた。

駒は、王、士、象、馬、車、包（黒木）、
帥、仕、像、馬、俥、砲（ジン木）

と刻されていて棋盤は折り畳み式であつた。今はそれを指す人も駒や棋盤も見なくなつた。

ウナリ崎の昔話

多柄村より浦内村へ移つた前田原家の男は、働き者で人々から大変褒められ、その者の作物に限つて鳥獸の害もなく、毎年豊作で裕福に暮らし、人情も厚く、乏しい人達には食糧を分け与え村人に敬慕される福德円満の者で、その妻女もなかなかの美人で夫に劣らぬゆかしい心の持ち主であつた。

同村の内間という男は、犬を飼つて狩りをするのが生業で、しかも男前が良く、口も手も八丁という隅におけるない男の口車にのつた前田原の妻女は、その男とわりない仲になつた。しかしグータラで働きがなく、口先で人を騙し物をかすめ取る甲斐性のなき、ふしだらさに嫌気が差し始めた件の妻女は、何とかして別れようと画策する。これを知つた内間は自分の働きのなさやグータラを棚に上げて前田原を憎み、一夜その家に忍び入り寝込みを襲い胸を突き刺し、瀕死の状態にした。村中大騒動で善後策を話し合つたが如何するともできぬうち死期を知つた前田原は、自分が死ねば遺体をウナリ崎端に近く埋め、クバの木を植えるよう頼み、女の浅はかさと男の非情を恨み四つ足の獸と、婦女子はウナリ崎を廻航させぬと、恨み死にしたという。以後、同ウナリ崎は四つ足の獸と、婦女子は石垣旅には浦内村に必ず下り、ニシミジ（三軒屋）まで陸行し、そこから乗船して旅を続けたという。

もしそれを無視して廻航すれば忽ち風波が立ち舟を覆し、或いは、帆柱を折り航行できなくなつたという。昭和四、五年頃までは刳舟であつたので、旅をする者は固く右の遺言を守つてきたという。（大浜正演さんの話）

大津波後のイミシク高台への移住

一七七一年明和の津波をナーニ、浦内川の支流の河口のタカラで迎えた多柄村、干立村の生き残りの人々は津波の再来を恐れ、ピサドウ村がミニズクによつて滅んだ昔話を思い出しイミシク、ナーニの高台へ移り住んだ。河口が変わつた浦田川の西に流れる支流は、与那田川と名称を替えた。昔の本流は、アマダウチ、マラントウ、チクララ地帯の僅少な

水源となつた。与那田川は風波による土砂の堆積が始まり、マヤパタラの兼久地を形成、雑木、雑草が生い茂る場所となる。しかし、貢布の乾かし晒しには是非なくイミシクの高台から与那田川迄の往還を余儀なくされ、作物の収納には高台への担ぎ上げに難渋し、稻の収穫時に南風の吹き荒れる場合には稻束を濡らしてしまふこともたびたびだつた。濡れた稻を乾かす二重の手間と時間の無駄を考え、現在の干立地区内への移住が始まつた。干立人の宇保の兄弟が移住の先鞭をつけ、全員が後を追つて移り終える。これは、大津波後の事だとの口伝えのみで記録もない。

一七七八年、与那霸在番が大津波後の八重山復興に尽くされた頃はイミシク高台地にてその恩恵を受け、二、三〇年後の一八一四年頃には干立地内に移住を終え、多柄御嶽もスバアより金座山西麓に遷座祭祀したことだろうと考えられる。

世の神の元御嶽（多柄御嶽）

元の御嶽は多柄、不したて（干立）両村建ての有若氏大宗初代がナメラ台地に村建ての際、守護神として招請し大アトウクに鎮座させ祈願し、多柄の波立ての台地に移動したときスバアの岬に遷座せしめた御嶽であるが、多柄不したてと両村に分離し、上原村建てに有若氏を始め大多数の多柄村人達が宇那利先のスギバンの地にまず移動、残余の人々が干立人と共に明和の津波の洗礼を受け、イミシク高台、さらに現在地に移つた時に金座山の西山麓の現在地に再度遷座せしめたという歴史をもつ、多柄村建て以来の御嶽で最も古く由緒あるものである。イビ名神名ワタリ神トウリ神として一七一三（康熙五）年の『琉球国由来記』各村の御嶽名簿に掲載されている。

上原村建ての際、有若氏直系の一四代寛智の時、多柄村の人々をひきつれて上原村の建設に参加したが、上原村の廃村にともなつて浦内村に移動した。上原村にある多柄御嶽の香炉は、南南西、卯辰の方角の多柄村の跡に向いている。

干立御嶽

神名トウリチキトビカイ（元御嶽への「取次ぎと控え」の意味であろうか。）

この御嶽は、イミシクより現在地に最初に住み付いた宇保家の兄弟が、ウーニファが貢納船発着の潮刻の関係で、多柄御嶽への遙拝所として拝詠した個所跡に、個人の拝所として建立したのが始まりで、比較的に新しいと思われる。おそらく一七七八年前後であろう。それまでは多柄御嶽で村の総ての行事は取り行われてきたが、この個人の御嶽がブザ（平民）の性格を帯びた御嶽になり、それ以後、多柄御嶽は元の御嶽と称され、士族の多柄人が拝跪し、下の干立御嶽には干立人が拝跪するようになった。豊年祭、節祭の両祭は平民主体の祭事なので自然と干立御嶽で執り行われることになったと思われる。

井戸の変遷

一六九四年には石垣地方では掘抜井戸が穿ち始められるが、西表島の場合は全島が山々に覆われていて、干立村も金座山の山麓にある。井戸を穿つ以前から流水を塞ぎ止め井堰を造り、或いは流水を汲み取つて使用する手段方法で潤沢にある水を利用してきた。諸所に転住して当地内に納まつてあるが村立住居の踏を見れば自然の恩恵を巧みに利用して來たことがわかる。井戸を穿つのは石垣地方より三、四〇年も遅れただろう。

干立村の土地は、風波での流砂が堆積した砂土であるので二、三米も掘れば地下水が出来る。この水は塩辛く、煮炊きには差し支えないが飲用には不向きで飲み難い。簡易水道ができるまでは、やはり塞ぎ井戸の世話にならねばならなかつた。村に入る東西の道路を境界に南北に区分、南方の村人はアダヌカ一、北方の村人はウイヌカ一と呼ぶ塞ぎ井戸を運用していた。

与那田橋の変遷

一六八一（天和元）年に、はじめて与那田川に木橋がかかつた。瀬田盛崎（方言ではシドゥン）から干立村の筆の先のように砂地が伸びた、現在のマヤパタラへ木橋を架け往還の困難と不自由を解消した。橋をかけたのは石垣親雲上（ペーチン）信明と伝えられる。しかし外洋に面していたので大風による倒壊と海虫の侵蝕が多く、修復が度々で村人の労苦が多く時間の浪費が甚だしかつたという。三七年後の一七一八（康熙五七）年に御蔵夫一八六〇人公役夫一三〇〇人、合計三一六〇人を使役して長さ四一間、幅二間の石橋を建設した。干立村を南北に貫く道を川岸まで延長して対岸のカビヤへ矼（いしばし）を架けた。責任者は慶田城与人昌存と伝えられ、カビヤへの昇り口に石碑が残つてゐる。紙を漉いた所なのでカビヤ（紙屋）と言われたようだ。紙を製した年代も記録もないようである。最近まで製紙原料のカビキ（和名アオガソビ）がマヤパタラに自生していたが、今は見かけなくなつた。

干立村と祖納村の往還は石橋を渡り、対岸の山裾の小道を巡つて松山さんの田の畦道伝いに行き、現在は記念運動場になつてゐる元養蚕飼育所の桑畑を通るのが学校への通学路であつた。この道は、昭和八年木橋が元の外洋に面した箇所にできるまで使用されたのである。その石橋の跡の岩は、昭和五十二年の北岸道の開鑿の際、取り崩されてミナピシ道に礎石として埋められ、一片の石も残つていない。カビヤの登り口に架橋の石碑があつて、その存在を物語つてゐるのみである。

干立御嶽のはじまり

一八二七（道光七）年、西表親雲上ウーニファー有若氏泰規がマーラン船を刻んだ絵馬を干立御嶽に奉納してある。口伝によればウーニファー泰規の多柄御嶽へのお通し祈願の控え所跡地に、宇保家の兄弟が雨露を凌ぐ掘立小屋を建て自家の拝所として祈願祭祀を始めたというが、創建年代は不明である。これが干立御嶽の始まりで、山麓にある多柄御嶽への遙拝所、つまり取次祈願の控所の性格をおびていたが、やがて独立して干立御嶽となつたものである。

村の祭神事はすべて世の多柄村建ての租神を祭つてある多柄御嶽で執り行われていた。ジンバイカ一（配膳井戸）、チャネーカ一（お茶水井戸）が元の御嶽前にあり、祭神事の際の煮炊きおよび湯茶はこの両井戸の水を使用した。イビへ向かつて右手がチャネーカ一、左手にあるのがジンバイカ一である。古くはパイドゥンヤ（拝殿）も右手のチャネーカ一近くの広場にあつたとの古老の話である。大東亜戦争後の食料難の時に畠として開墾され、昔の形態が崩され、今はイガダイ（苦竹、和名ホウライチク）が植栽されている。故大浜正演さんによれば、拝殿は「自分達が物心ついた頃に既になかつた。」との話である。

干立では村の祭事毎に、多柄御嶽へのニガイフチ（口願い）をおこなう。神様に下の干

立御嶽にお移りくださり、祝詞を受けてくださるよう言上して、チカ一（神司）、チヂビは下の御嶽に列席する。

神司とチヂビ

元御嶽の神司とチヂビは士族出身であったが、下の御嶽の神司とチヂビは平民出身であった。しかし、下の御嶽での席次は下の御嶽の神司の方が上座になる。そこで、平民の下座につくことは士族の体面上納得できないとして、元御嶽の神司とチヂビは平民である力イレ（川平家）の人に頼み込み交代してもらっていたという。ちなみに、西表寛次さんの説明によると、祭の中心となるトウリムトウは、上原村創建に本家が参加した後は、もと士族のトウヌシケ（西表家）であった。西表家が石垣島の宮良村へ転居した後は、カイレがトウリムトウとしての礼儀を受けている。

士族・平民との階級意識が残っていた大正末年から昭和の三、四年ごろまでは、この状態が続いた。四民平等になり封建的な意識が崩れた後は、元御嶽の神司とチヂビはトウヌシケ（西表家）に戻り、西表ブナリさんと弟の寛次さんが神司とチヂビになった。この姉弟が亡くなり、養子の秀規さんが妻の出身の宮良村へ移り住んだ後は、屋号アルネの新城寛好さんが引き継いでいる。神司は長いあいだ空席のままだったが、現在は石垣長有さんに嫁いだ姉の好子さんが継いでいる。

豪傑ウーニファの足あと

アーレという屋号をもつ饒平名家にウーニファと呼ばれる豪傑がいた。ウーニファは、鬼のように力が強い子という意味と言われているものである。ウーニには、船頭という意味もあるようで、事実ウーニファは貢納船の船頭で、船の出入り時には多柄御嶽へ参詣して、航海の安全を祈願していた。ところが津波後浦田川の河口がウナリ崎湾に変わったため、干立湾内に砂の堆積が著しく干満の潮位も甚だしくて出航に支障を来たすことが多くなった。そこで、現代の干立御嶽の浜崎に多柄御嶽へのお通し控え所を設け遙拝祈願して出航し、貢納の役職を恙なく果たしていたとの事である。貢納船を繫留するために鉄の塊を埋めたと伝えられる箇所が干立御嶽前の岸辺近くにあり、直径三、四尺ほどが赤褐色に変色してその跡をとどめていたが、一九九二年の防潮護岸工事で埋められてしまった。こうして干立村の歴史のあかしの一つが消滅した事になる。

また、当貢納船に使つたと伝えられる水棹が、ウバンシャという屋号の大舛家の家に使われていた。この家は二間半に三間の茅葺きの家で、キヤンギ（イスマキ）の柵として仕様されていた。仲筋家の人々の本土移住によって、家屋が取り壊され、その後は行方不明になっている。

多柄、干立両村人の対立

有若氏を同祖としながら多柄、干立と二つの村に分裂し、互いに誹謗しあい対立し事毎に角突き合わせるという不仲であった。上原村建てを幸い、多柄村の人を主体に有若氏一家の大多数がこれに応じて上原村の住人となつた。対立不仲の原因は判然としないが、士族と平民の対立ではなかつたかと亡父が語つていたとのことである。（故新城節さんの話）残つた数少ない多柄人は多勢の干立人に太刀打ち出来ず、干立御嶽が建つて拝跪される

ようになると、ほとんどの平民はこれに参加して祭祀し、干立御嶽は平民の御嶽としての性格を帯び始める。祭行事は平民が主体となつてとりおこなうので、自然にこの干立御嶽で執り行われる事になる。それ以後、元の御嶽を「上の御嶽」、干立御嶽を「下の御嶽」とならび称されるようになつてゐる。

それでも、アトウクに招請建立し、スバアに遷座し、さらに金座山の西麓に鎮座せしめた多柄村創立以来の守護神として崇め拝跪してきた御嶽が、今日では袖にされた形であるのは如何なものか。拝殿の件もまたしかりである。

古い歴史をもつ三つの御嶽

元御嶽は一七一三（康熙五二）年にまとめられた『琉球国由来記』にイビ名「渡り神通り神」と記されている。干立村には別に「雨御嶽」と「穀御嶽」が記録されている。

アマウガン（雨御嶽）は名のとおり水元の神を祭祀しており、万物の生育に欠くことのできぬ天候を祈願する重要な役割をうけもつてゐる。雨御嶽は、ナンガデ（長堂家）の系譜が代々受け継いでいるが、故長堂孫全さんとキシテ（宮良家）のユウ子さんが祭祀してきた。孫全さんが没して以来、現在チジビは欠員となつてゐる。場所は、イミシクの高台地の南側下のピサザシの山際にあり、タキ岳の中腹のイミシク寄りに雨乞いの碑がある。

穀御嶽には、八重山郡下唯一の粟の神が祭祀されている。これは、干立村のミザッサ（美佐志家）の祖先が粟の種子を中国大陸から持ち帰り、各村々に広く植栽せしめたことから祀り始めたと言われる。粟種をもたらした祖先の名は不祥で、創建年代も明らかではない（故美佐志加那さんの話）。粟種をもち來つた來歴を記した記録文書等は、一尺に一尺二、三寸角の木箱に納められてあつたが、昭和八年に干立村西方より東方へ乗り越した台風の際、床上四、五尺も浸水したため、祖納村へ全員避難した。そのときの高波で箱ごと流失してしまつた。現在、穀御嶽は、新城トヨさんと兄の寛助さんが祭祀している。場所は、県道から干立村に入る手前右手のスーカー（潮井戸の意味）にある。

多柄村から上原村建ての経緯のまとめ

一、一七三四（雍正一二）年、過半数が移転して宇那利崎に村建て（『参遣状』難易の村屋調）スギバン、ナバン川地区へ。

二、一七三八（乾隆三）年七〇人程が別れて、宇那利崎の北部に村建て。現在のニシミジ、富崎野あたりと思われる（『参遣状』および、里井洋一「上原村は何処に在つたか」参考照）。

このあと、村人は船浦マーレー川左岸地区に移動し、ピナイサーラの滝の名をとり、鬚村（ピナイムラ）を建てるが、多湿と悪疫のため、同地区船浦のアンザ石のある平野部に再移動する。（故小底宣佐さんの話として故小底アナリさんに聞いた話）

三、一七五〇（乾隆二十五）年、多柄村一五四人、浦内村一二七人、祖納・干立両村二九四人で村敷替えを願い出るが、吟味するとして保留扱いになる（『参遣状』）。

四、一七六七（乾隆三二）年、干立村十戸余りが上原津口の上に、現在の上原村の富崎岳ふもとよりに小村を立てる（『慶来慶田城由来記』）。

五、一七六八（乾隆三三）年、与世山親方が八重山検視の際に上原村建ての願いが聽許される（『参遣状』）。

多柄村の消滅

上原村はこうした経緯で、多柄村の人が主体で村建てされる。スギバン、ナバン川平地に村建てした人々、ニシミジに村建てし船浦マーレー川左岸に移動、更に同地内のアシザ石の平地に移動した人々も上原村建てに合流して完結する。同年慶田城村は西表村に、西表村は上原村と改称される。歴史は非情で苛酷である。多柄村は住民主体が上原村建てに移動したため、上原村建ての完結と共に由緒があり歴史のある多柄村はこうして歴史から抹消される。誠にもつて皮肉で遺憾と言うほかはなく涙も出ぬ。本来多柄村主体で村建てしたのであるから、地名の上原でなく歴史があり由緒がある多柄村と呼称すべきであった。そうすれば多柄村は歴史から消されずに済んだだろう。

多柄御嶽の拝殿の再建いまだならず

一八四七（弘化四）年、マーラン船の絵馬奉納より一〇年遅れて、「光永」の扁額が有若氏の子孫であるウーニニアが干立御嶽に奉納してある。多柄村建ての祖神を祭祀する上で多柄御嶽に奉納されるのが筋と考えられる。貢納船の出入りに安全を祈願したのだから。しかし、当時は既に拝殿も朽ち倒れ再建のめどもないでのやむなく拝殿のある干立御嶽に奉納したのである。大東亜戦争後、昭和二十三、二十四年頃、多柄御嶽の拝殿建設の議が故西表寛次さんによつてなされた。しかし、村人は多柄、干立村の来歴を知りながら、戦後の食料難に名を借りた大多数の干立村の人たちの反対にあい、その他の人たちも御嶽に関して口出しすれば御難の虞れがあるのでして誰ひとりえて賛成するものがなく、否決され、その後二度とこの拝殿建設の議がなく今日にいたつている。

昔からの対立を乗り越えて

多柄人と干立人は犬猿の間柄であり事ごとに角突き合わせ不仲であった。考えてみれば、今日では干立人の多くが、多柄村を発祥とする有若氏の名字の「泰」もしくは「寛」の字を名乗っている。もともと同祖同根なのであり、有若氏の流れであるから、住昔からの不仲や対立を忘れて和解すべきではないだろうか。

昔の気持ちが、今まで引き継がれ、形を変えて排他的になり敵視や侮蔑になつてゐるとなれば甚だ残念なことである。井の中の蛙と言われても仕方あるまい。これが干立村の発展と向上に足枷となつてゐるとしたらまことに惜しいことと言わざるをえない。

上原村と浦内村の廃村

一八七九（明治一二）年廢藩置県があり、琉球は沖縄と名を改め日本に付属、大和在番もなくなるがマラリアに痛め付けられながらも上原村は存在し細々と名脈を保つていた。ところが明治四二年に一〇戸程が鳩間村へ移り、他は浦内村に移住、実質的に上原村は廃村となる。この時、有若氏の本家は多くの人々と共に浦内村に移住した。浦内炭坑（明治二八年）に大倉組が西表島での石炭の採掘を始めフナリヤを本據とし一部浦内に採炭を始めた。一時期は繁栄していた浦内村も炭坑の廃止に伴い一戸減り二戸減りし、子弟の学校就学がこれに拍車をかけ廃村の憂き目にあつた。昭和八、九年の事である。現在の干立村はやは

り干立人が主で、上原村廃村後の多柄人、浦内人の移住で構成されている。ナメラ台地に村建てした住昔の多柄村に還ったと言えるのではないか。

上原村、浦内村から干立村に来た人々

ウバンシャ（大樹家、絶家）

カマメ（糸数家、在石垣）

ギメ（宜間蒲太家）

宜間常吉（在石垣）

クシケ（小底家、在石垣）

友利石戸（在石垣）

トウナレー（前崎家、在石垣）

ナカイ（平得家）

ニシメ（西銘次郎家）

サクデ（崎枝真勢、在上原）

イツパンヌサクデ（崎枝多良）

崎枝政子（崎枝多良の分家）

崎枝加銘（在那覇）

崎枝龜次郎

マイタレ（前田原家、その後舟浮に移住し現在は沖縄在）

ユヌンヤ（与那国家、兵役除隊満期後居住）。

ユレー（崎枝亀家）

干立村の人々

アーレ（饒平名家）

アルシケ（泰規の養子、新城家、在沖縄）

アルネ（新城家）

アルンテ（石垣正一家、在石垣）

アンネ（石垣家、在上原）

イラベ（真謝家）

ウラッチャ（浦内家）

カイレ（新城寛忠さんの家）

カネー（黒島家、在沖縄）

キシテ（宮良家）

キダネ（慶田盛家、分家の寛助さんは在沖縄）

クイズ（もともとスリズつまり集会所のあつた所だが、西表ブナリさんが住んでいた）

シツサベ（白保家、在石垣）

スゲ（塩川家、祖納より入夫家）

スシメ（稻福家、在石垣）

タケー（前鹿川家）

前鹿川徹（分家）。

タムレ（田盛家、在石垣）
タンピセ。

トウヌシケ（西表家、養子の秀規さんは富良在）

ナツチエ（仲筋家、在大阪）。

ナンガデ（長堂家、在石垣）

パンシケ（絶家）

パマデ（浜端家、絶家）

ピサツサ（石垣家、在沖縄）

ピサデ（平田家、絶家）

ピサヤ（前大家、在那覇）

ピサンカイ（平川家、絶家）

ピネー（髭川家、在石垣）

フタベ（宇保家）

プレ（大浜家、在平得）

マラケ（黒島家、在石垣）

ミザツサ（美佐志家）

ミナケ（池城家、在石垣）

ユナデ（孫吉、絶家）

他市町村に転出した者あるいは上原村に戻った者もいる。

八月十五夜の獅子祭

往昔は巳亥の日を「トウシヌユ一（年の晩）」といい、一年の締めくくりの日で、翌庚子の日が年始の日であつたようだ。

古老によれば獅子は村の守護神として遠い昔から崇め奉られ祭祀されて来た。獅子祭は旧暦八月十五夜スリズ（集会所）に集まり、月の出を待ち獅子、ミリク、オホホを飾り、年間凡ゆる災厄や病魔等を排除し村人の無病息災を守り、子孫繁栄と植栽物の豊年と海の豊漁をもたらして下さつたお礼として、お神酒、塩採、花米等を供え感謝の念を捧げて祭祀し、村の守護神としていつに変わらぬ御加護を祈念する祭りである。

祭祀後獅子は此の日を期して昇天し天上にまします諸々の神々へ、一年間の吉悪、災厄の有無多寡および経過を報告なされ、節祭の庚子の日に下界の此の村に降り守護神として鎮座なさる。かつて大昔から十五夜のマイザトウの前の首尾の祭祀をせぬうちは節祭をする事ができなかつた。つまり獅子祭り前に巳亥の日が巡つて来ても節祭をすることが出来ぬ習わしであった。戦前戦後の一時期迄は老若男女多数揃い守護神を祭り感謝を捧げ祭祀していたが、人口の流出に伴い過疎化が進むにつれ村の役職者ならびに存命のお年寄りのみとなり、近年は村の役職幹部だけの祭祀となつて寂しい限りである。然も獅子の首尾祭りの謂れが忘れられ、ゆかしい風習が廃れつつある。

伝承を無視すると

「昔からある村の風習はなくするな。また、ない習俗はつくるな」との伝承がある。若い人達は此の言葉をよくよく囁みしめ吟味して後世に伝えてほしい。

一九九〇年平成二年の節祭には此の伝承を無視し節祭を執り行つて来て旗頭を倒し破損せしめると言うハプニングがあつた。厳に注意すべきである。古老に聞いたが「十五夜の獅子祭前に節祭を行つた覚えはない」と故大浜正演さんと故黒島英輝さんは話していた。祖納村ではその習俗を守つたためか無事故であつた。

なぜ干立の獅子は雄だけか

昔は獅子には「マイザトウ」のマイと唱え祝詞にもそのように唱える。獅子は雌雄二頭あるのが本来の姿と思うが干立村のみ雄だけで雌が欠けている。大昔から雄のみであつたか否か、口伝も文献もない。前記の二氏に聞いた処、「自分達の知つている時から雄のみであつた。」と、一七六八年明和五年に上原村建ての際多柄、干立村建ての有若氏本家が多柄村の人々を引き連れ移住した際雌獅子を守護神として持参したに違いない。何しろ両氏共母の胎内にも居なかつた頃の事で知らない事であろう。上原村残存の方々も既に幽冥をことにし聞き出す事も出来ない。山々に圍まれ雨が他町村に比較して多く、湿度が高くマラリアの風土病もあり、南蛮船等の漂着も多い土地柄で医師のいない当時の人々は勢い神仏に頼るしかなく、木や石も神仏として拝跪した時代で守護神として獅子に依據し上原村建てに特別持参しただろう。以後干立村には雄だけの獅子となつたと思われる。

獅子頭製作の年代不明、口伝もない。今有るのは二代目で前鹿川石太さん宰領で美佐志加那と大正末の頃製作。オホホ、ミリクの面も同代に再調製したと伝えられる。

猪にまたがつた白髪の神にあう

干立より浦田田原へ山越えするやつと人が通れる程の山道、戦後ザラバ浦内川支流まで農道ができたが今は田圃も荒れ地になりせつかくの道も放置されて崩壊し、昔の小道になつていて、そのナータ山道を浦田へ農作業に行く男が登り口を登りきり平坦な道になり、もと営林署苗圃のあつた付近に行つたところ、白髪の顎鬚を膝まで垂れ下げた赤ら顔で白装束の異相の男が、体長四、五尺程のボスと思われる大猪に跨がり三、四〇頭も引き連れ浦田の方面から来るのに出逢つた。仰天した男は傍らの林の中に退き経文を唱えひれ伏して異相異様な人の通り過ぎるのを待つた。余りの恐ろしさ、怖さに胸振るいし口もガクガクし身震いも止まらず地面と一つになつて異相の男、猪の群れの通過を待つた。猪に打ち跨がつたくだんの髭の異様な人はこの男を「ギヨロリ」一睨みして素通りしていった。それをやり過ごした男は氣も動転逃げようと立ち上がつたが腰が抜け体も硬直し、進むことも退くことも出来ず小一時間程もそのままにしている外なかつた。漸々氣を静め這いながら家まで辿りつき寝込んでしまい半年程も動けず頭の髪も皆抜け落ち回復するのに相当の日数が必要だつたと云う。氏名、屋号等残念ながら聞き洩らしたとの話（美佐志加那さんの昔話）。

人間が脱皮して若返らないわけ

昔々ガヤドウナリヤ（和名ヒバリ）が神様のお使いとして人間界につかわされた。神様の依頼は、脱皮する薬を持って人間に薬浴させることだつた。ところが、ヒバリは途中フビ（和名グミ）の実が鈴なりになつていて赤く熟れているのを見、ちょうどお腹もすいていたので薬入りの瓶を道端に置きフビの実を食べている間に蛇や蟹が来合わせ、薬入り瓶

をひっくり返して浴びてしまった。それで、蛇や蟹は脱皮するようになった。ヒバリは僅かに残っていた薬を仕方なく人間の手足の爪にのみかけたので、人間は手足の爪のみが生え替るようになったと言う（美佐志加那さんの昔話）。

ザンヌスーカシ（ジュゴンの潮垣）

干立の夫婦石トウベラアからピサザン（平崎）にかけて、石を並べ積み上げて潮垣をつくり、干潮時その中に逃げ残った魚を鉛で突き取ると言う原始的ながらのしきけがあった。昔は、各村々に専用の潮垣があり、今でも各所に散見される。前鹿川家の石太爺さんの若かりし頃のこと、ちょうど当番の見回りで潮垣の中にザン（ジュゴン）が取り残され干されているのを見つけ村に報告した。村人総出で捕獲しようとしたが、大暴れしてとうとう潮垣を踊り越えて身体の中に鉛を持ったまま逃げ出した。それを松の刳船で追いかけ、外離島、ヌバン崎、鹿川湾、南風見岬を経て、新城の下地島で漸々仕止め持ち帰ったと言う。往昔は干立湾にもザンが住みついていたとの事である。王朝時代は新城島の近辺ではザンが相当いたらしく貢納品にザンの肉を含めていたとの話である。ジュゴンのことと西表島の方言ではザンといっている（美佐志加那さんの昔話）。

人追い墓の話

スシピヤーという場所に赤竹が自生しており昭和の五、六年頃迄見受けられたが、今は松や他の雑木におされて諸所に草竹として僅かに残っているだけである。三、四月にかけ竹の子を折り取るため四、五名の子供達が行きそれを取りながら、この付近の昔の墓が、人を追う等と親から聞いた話をしつついるうち、その墓の付近であつたらしく、墓の中から石垣の崩れ落ちる音や、骨壺を割る音、多勢の人の言い争う声、大雨が降りしきる音がして來たのでびっくり仰天して逃げ帰ったと言う。家に帰りその話をした処、昔の墓で人が來るとそのような事があり人を追い払うので昔から「人追い墓」として誰一人近寄らないとのことであった（美佐志加那さんの昔話）。

